

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅴ

1999年3月

伊丹市教育委員会

序 文

本書は、平成3年から5年の間に行った市内遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。当初は平成7年3月に刊行の予定でありましたが、同年1月に発生しました「阪神・淡路大震災」の影響で遅れ今年の刊行となりました。

震災では、国の重要文化財であります旧岡田家住宅のほか市内の指定文化財に大きな被害がありました。伊丹市では震災直後から建造物や仏像の修復事業を行ってまいりましたが、その事業も今年で完了の運びとなりました。

震災はこうした有形文化財に限らず、埋蔵文化財に対しましても少なからず影響を与えています。被災した住宅の復旧・復興事業が、震災直後から一斉に行われるようになり、埋蔵文化財包蔵地内での土木工事が一挙に増加し、復興事業の促進と遺跡の保存という難しい状況が続いてきました。今後は、復興事業に伴う発掘調査により出土した膨大な資料を整理し、社会教育資料として活用が図れるよう努めて参りたいと思います。

伊丹市教育長 乾 一雄

例 言

- (1) 本書は兵庫県伊丹市内の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- (2) 発掘調査及び整理作業は、国庫補助事業として伊丹市教育委員会が調査主体となり実施した。
- (3) 発掘調査は平成3～5年度に実施し、平成6年度から整理作業を実施した。
- (4) 本書には次の遺跡の発掘調査の成果を掲載している。

昆陽寺境内遺跡第3次調査

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第102次調査

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第108次調査

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第118次調査

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第121次調査

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第128次調査

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第132次調査

- (5) 発掘調査は、小長谷正治と細川佳子(囑託)が担当した。本書の執筆は小長谷正治、細川佳子、瀬川眞美子、岡野理奈が分担し、文責は各文末に記した。
- (6) 本書所載の資料は、伊丹市教育委員会にて保管している。

目 次

I	遺 跡 の 概 要	1
II	調 査 の 概 要	4
III-1	昆陽寺境内遺跡第3次調査	5
III-2	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第102次調査	9
III-3	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第108次調査	12
III-4	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第118次調査	16
III-5	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第121次調査	20
III-6	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第128次調査	28
III-7	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第132次調査	32
IV	ま と め	38

I 遺跡の概要

位置と環境 伊丹市は、兵庫県の南東部に位置し、西を六甲山地、北を長尾山地、東を千里丘陵に囲まれた西摂平野のほぼ中央にあたる。伊丹市域のある西摂平野は、北の長尾山地から南へ向かって長く延びている伊丹台地(洪積台地)と、猪名川左岸の沖積地からなる。伊丹台地は市域の大半を占め、南流する武庫川と猪名川の間を標高40～5mと南へ向けて緩やかに減じていき、尼崎平野で没する。伊丹台地の西縁には昆陽寺境内遺跡が所在し、標高20m前後を測る。一方、伊丹台地の東縁には有岡城跡・伊丹郷町遺跡が所在し、標高は15～20mを測る。有岡城跡の東側に広がる猪名川低地帯(沖積地)との比高差は5～10mの急崖をなす。有岡城は平城であるが、このように自然地形を利用して築城されている。発掘調査は昭和50年より始まり、昭和54年12月に中心部は国の史跡指定を受け、現在は史跡公園として整備されている。

昆陽寺境内遺跡 昆陽寺境内遺跡は、伊丹市寺本2丁目に所在し、国道171号線が遺跡の中央を東西に走っていて、遺跡を南北に分断している。遺跡の規模は東西250m、南北350m

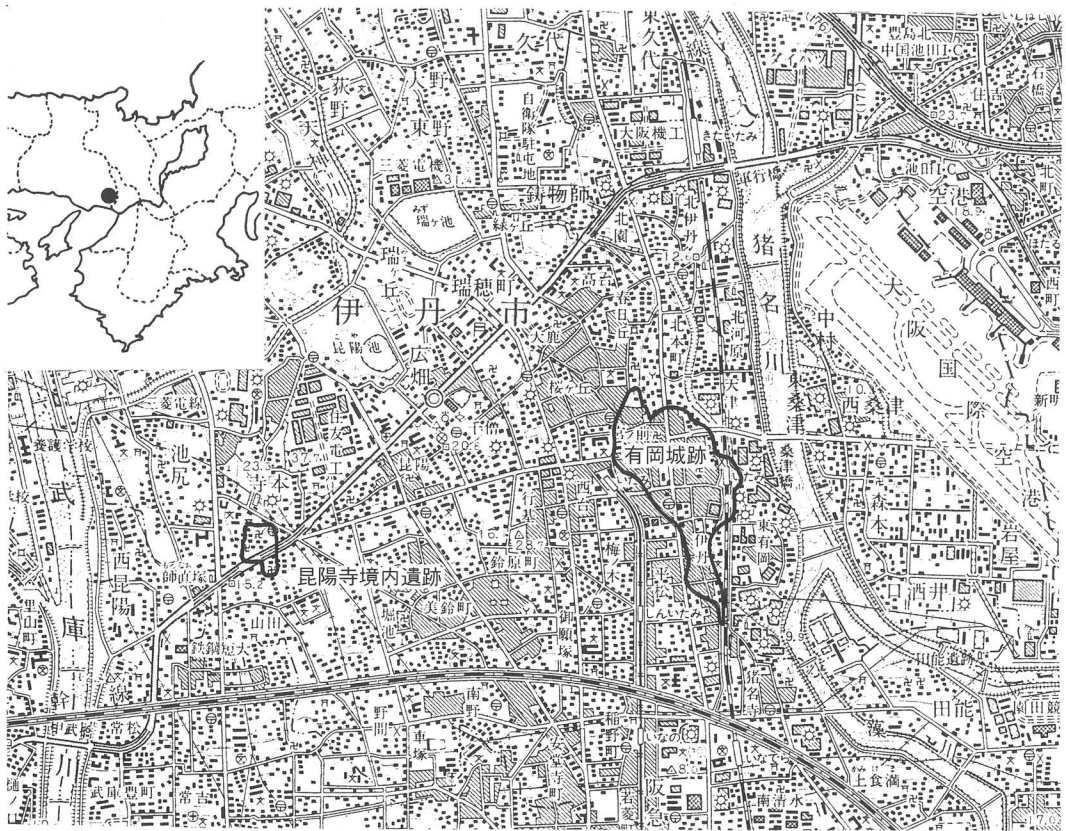


図1. 遺跡の位置図(1/50,000「大阪西北部」)

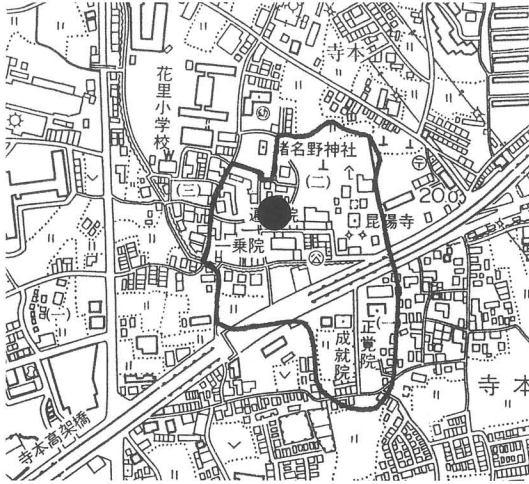


図2. 調査地点図(昆陽寺境内遺跡 1/10,000)

を測る。遺跡の範囲は、昆陽寺と現在の昆陽寺の塔頭である遍照院、一条院、正覚院、成就院の境内からなる。現在の昆陽寺の近くを西国街道が通っている。西国街道はかつては東海道と山陽道を結ぶ重要な陸路であった。昆陽寺は僧行基が天平三年(731)に創建した昆陽施院または昆陽布施屋の系譜をひく寺である。施院または布施屋は近隣の貧しい農民や西国街道を往来する農民のための救済施設あるいは宿泊施設であった。その後、戦国時代、伊丹を治めていた荒木村重が織田信長に背き、昆陽寺の堂塔は天正七年(1579)、信長の兵火にかかって焼失した。発掘調査で検出した焼土層は、この時焼けた跡と考えられよう。江戸時代の昆陽寺の様子は、寛政十年(1798)刊行の「摂津名所図絵」に描かれている。現存する朱塗りの山門と観音堂は江戸時代のもので、県指定の文化財になっている。

有岡城 有岡城は天正二年(1574)織田信長方の武将荒木村重が入城時に、それまで伊丹氏の居城として伊丹城と呼ばれていたものを改名した。伊丹城も堅固な城であったが、村重はさらに城の大改修をした。城だけでなく城下町をも堀と土塁で囲む惣構え構造とした。その要所を、岸の砦、上臈塚砦、鴨塚砦が守った。惣構えの規模は、東西800m、南北1.7kmである。主郭部は現在のJR伊丹駅付近で、周囲に土塁を巡らし、内堀と外堀に囲まれていた。堀を隔てた西側に侍町、さらに大溝筋の西側に町屋がある。侍町や町屋側にも最近の調査で堀を発見した。天正六年(1578)村重は信長に背き、有岡城は信長の大軍に包囲され、1年余りの攻防の末、落城する。村重の後、有岡城は池田之助が領有するが、天正十一年(1583)、美濃へ転封され、廃城となる。

伊丹郷町 侍町が焼き払われたので、廃城後、焼け残った町屋側から町は発展していった。文禄年間(1592~96)までに伊丹村に15の町が成立し、寛文年間(1661~72)には17町、元禄年間(1688~1703)には24町、享保年間(1716~35)には27町が成立し、伊丹村を中心に15ヶ村が一続きになって在郷町を形成した。初めは幕府の直轄領であったが、寛文元年(1661)からは15ヶ村のうち12ヶ村が近衛家領となった。伊丹郷町は近衛家の保護もあり、酒造業を中心に発展していった。伊丹郷町内の中心部には近衛家の会所が置かれ、有力な酒造家の中から選ばれた惣宿老や御金方等の役人が、近衛家の指示を仰ぎながら町の自治を担当した。

(細川)

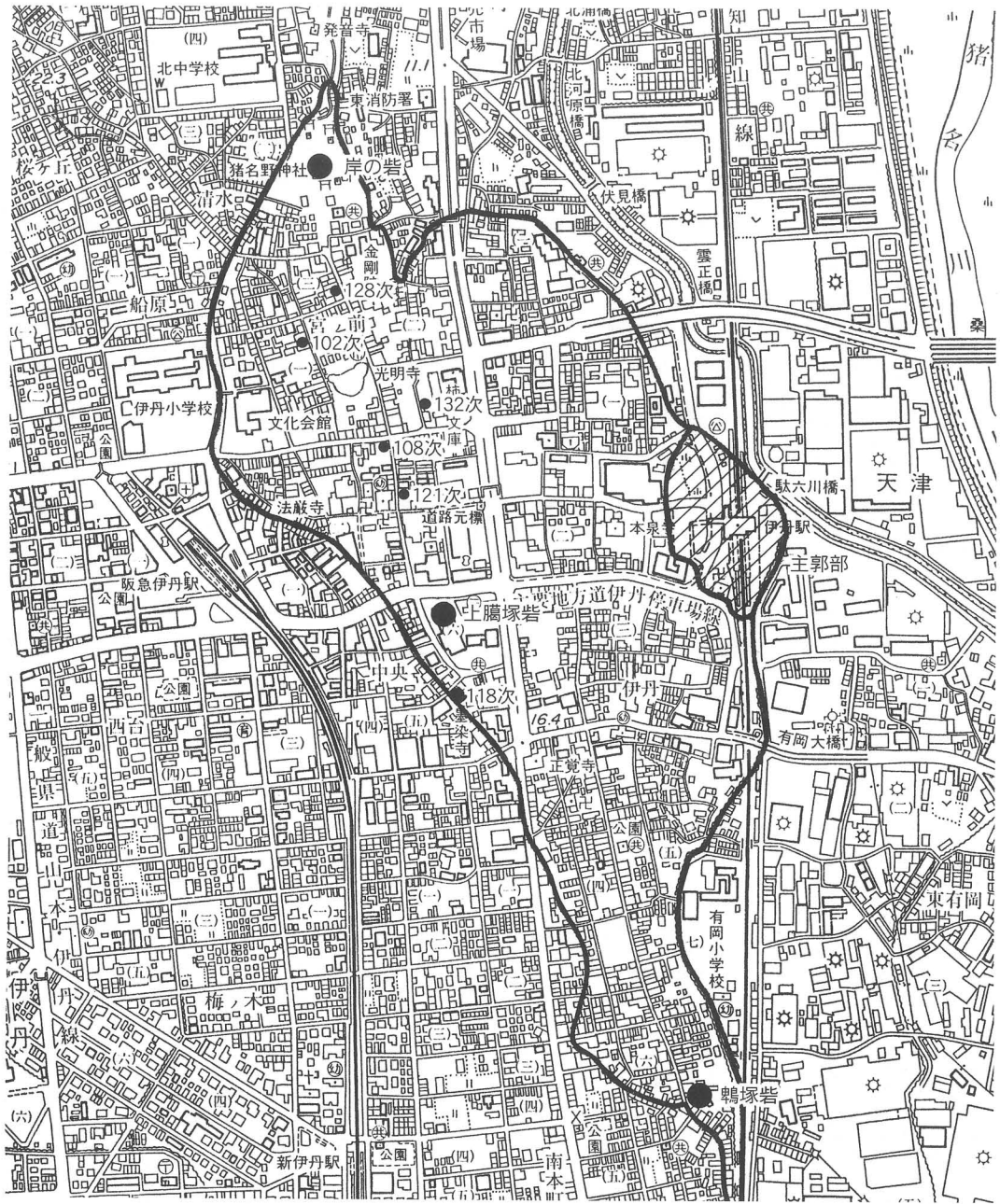


図3. 調査地点図(有岡城跡惣構図 1/10,000)

II 発掘調査の概要

本書は、平成3年度から5年度にかけて実施した国庫補助事業についてその概要を報告している。各年度別にみると、平成3年度は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第102次調査、4年度は同遺跡第108次・第118次、昆陽寺境内遺跡第3次、5年度は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第121次・第128次・第132次調査である。

発掘調査に至る原因は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第102次、121次、128次、132次調査が個人住宅建設、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第108次調査が、店舗付個人住宅建設、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第118次調査、昆陽寺境内遺跡第3次が寺院庫裏建設に伴って実施した。

これまでの国庫補助事業による埋蔵文化財発掘調査は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡を中心に実施してきている。これは同遺跡が市街地の中心部にあたるために、個人住宅の建設や建替え工事が頻繁に行われていること、および遺跡が地表下浅い場所から検出されることにある。本書では、有岡城跡・伊丹郷町遺跡以外の遺跡として昆陽寺境内遺跡の調査概要を掲載している。昆陽寺境内遺跡は、奈良時代の創建となる昆陽寺を中心とする遺跡で、僧行基の建てた昆陽施院の法灯を継ぐと考えられている。しかしながら、これまで境内などから奈良時代の遺物が発見されたことはなく、昆陽施院との関連は明らかになっていない。今回の調査は、この点について調査の関心がもたれたのである。 (小長谷)

(平成3年度)

遺 跡 名	調 査 地 点	調 査 期 間	面 積
有岡城跡第102次	宮ノ前1-91-9	平成3年6月25日～6月27日	16㎡

(平成4年度)

有岡城跡第108次	中央2-8-7	平成4年4月21日～4月24日	20㎡
有岡城跡第118次	中央6-3-3	平成5年2月16日～2月22日	30㎡
昆陽寺境内遺跡3次	寺本2-167	平成5年1月22日～1月27日	28㎡

(平成5年度)

有岡城跡第121次	中央3-398-1	平成5年6月3日～6月11日	90㎡
有岡城跡第128次	宮ノ前3-59-1	平成5年8月19日～8月21日	24㎡
有岡城跡第132次	宮ノ前2-5-3	平成6年1月18日～1月28日	50㎡

Ⅲ－１ 昆陽寺境内遺跡 第3次調査

所在地 伊丹市寺本2丁目167

調査面積 28㎡

調査期間 平成5年1月22日～1月27日

調査概要 昆陽寺境内遺跡は、伊丹市寺本にある真言宗昆崙山昆陽寺の境内を中心に、周囲の塔頭を含めた範囲となっている。

昆陽寺は、奈良時代の名僧行基の建立した寺院の一つに数えられ、その前身は、昆陽施院であったと考えられている。

現在の昆陽寺には、広大な境内に山門(江戸時代中期、県指定)、開山堂(江戸時代中期)、観音堂(江戸時代前期、県指定)、鐘楼(江戸時代後期)などの主要建物の他、広い境内には多くの小堂があり、古刹の観を呈している。また、周囲には、今回調査の対象である遍照院の

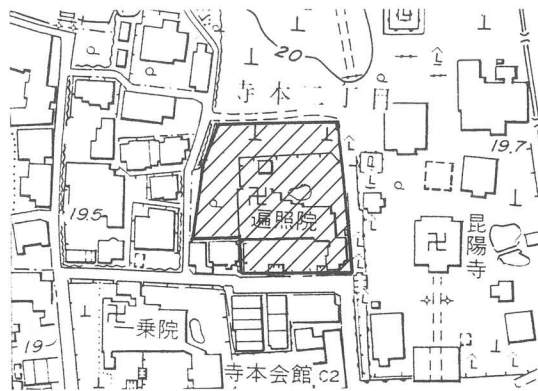


図4. 調査地点図(1/2,500)

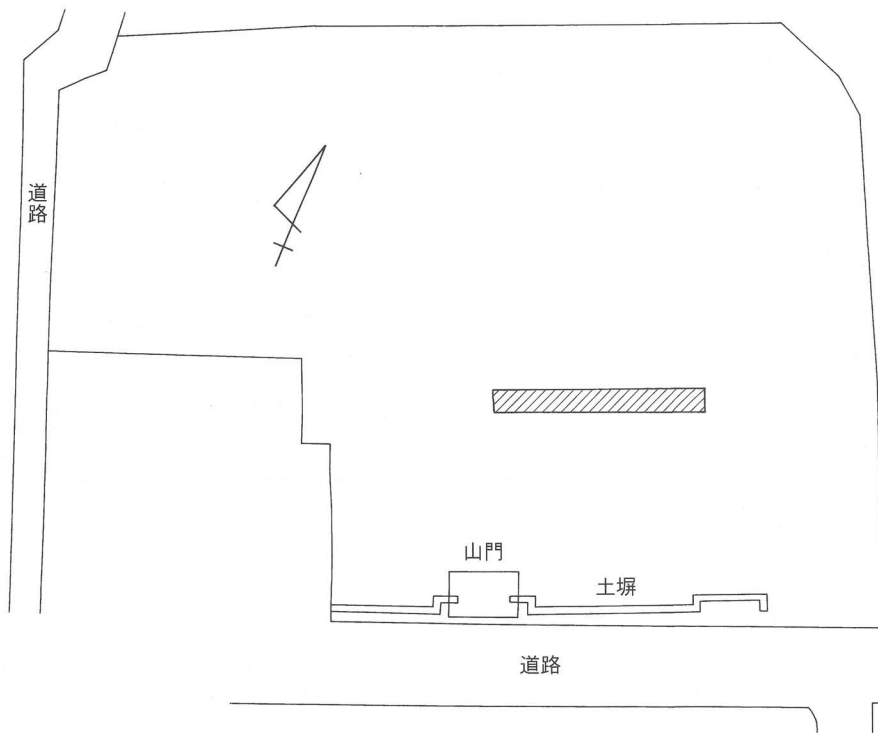


図5. 調査地点図(1/400)

ほかに、一乗院、正覚院が建ち並んでいる。

今回の発掘調査は、遍照院の本堂および庫裏の建て替え工事に伴って実施することになった。

本遺跡の発掘調査は、今調査で3回目となるが、寺院境内の調査は今回が最初である。調査規模は南北2m、東西14m、確認調査として実施した。

調査成果 検出した遺構は、溝2条、土坑2基、柱穴16基である。調査区が狭いため、これらの遺構が寺院のどの部分に当たるのか判らないが、遺構の時期からするとすべて遍照院に係わる遺構と考えら

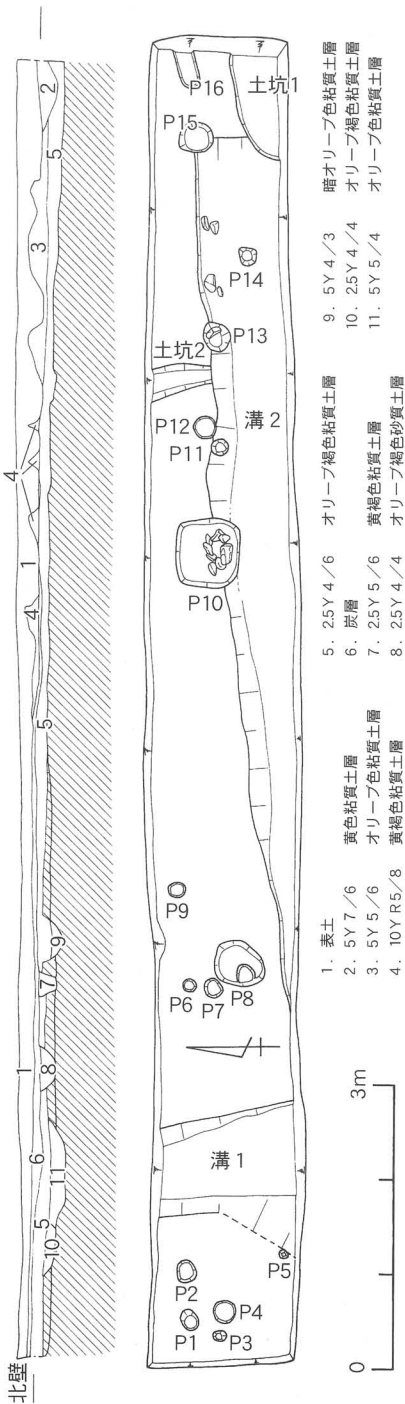


図6. 遺構図



写真1. 遍照院の現況



写真2. 礎石1

れる。

溝1は、南北方向に延びる幅1m、深さ15cmの溝で、調査区外で溝2と交わる。溝2の幅は不明であるが、深さは平均15cmである。溝の延びる方向は、溝1と直行すると考えられ、これらの溝が建物の基壇周囲巡らした溝である可能性がある。溝1からは、土師皿(ヘソ皿)、丹波焼壺、甕、瓦質羽釜などが出土し、溝2からは、土師皿、瓦器碗などが出土した。

調査区内には、小規模な柱穴(P1～P9、P11～P16)が点在するが、それぞれの関連は不明である。P10は、方形を呈する遺構で、内部に10～20cm大の石が詰まっているので、礎石の根石と見られる。規模は72cm×68cm、深さ9cmである。遺物は、P1とP2から土師皿(ヘソ皿)が出土している。

出土した遺物は全体に小破片であるので図示していない。

調査区の北壁土層中、第6層は焼土と炭の混じった土層である。表土の下に薄く広がっており、火災によって形成された焼土層と考えられる。火災の時期は判然としないが、層序からみて、江戸時代以前と考えられ、また、15世紀後半の遺物を出土した溝1が埋まった上に堆積していることから、この焼土層の時期を、15世紀後半以降江戸時代以前とする



写真3. 調査区全景

ことができる。

小結 昆陽寺は、先に述べたように奈良時代の名僧行基によって建てられたと考えられている。行基は、和泉国大鳥郡蜂田郷(大阪府堺市八田寺付近)の人で、百濟系の渡来人である。早くから出家して、薬師寺に入って修行をつんだが、後に薬師寺を去って民間布教に従事するほか、地溝・道橋・布施屋などを各地に開いている。

行基のこうした活動については「行基年譜」に詳しく書かれている。「年譜」によると、当地域に係わるものとして、昆陽上池・昆陽下池・昆陽上溝・昆陽下溝・昆陽施院・昆陽布施屋などを築いている。この中で昆陽寺は、昆陽施院につながるものと考えられているのである。昆陽施院は、「年譜」によると天平三年(731)に建てられている。

これまで、昆陽寺の本格的な調査は実施されていないが、奈良時代の礎石や瓦などが採集されたこともない。こうしたことから、昆陽施院と現在の昆陽寺の場所が異なるといった見解もある。今回の調査は、昆陽寺境内での調査ではないが、昆陽寺に隣接する場所での調査であることから、昆陽寺に係わるこうした不明な点について新たな発見を期待したのである。

発掘調査の結果は、先述したように、15世紀後半の遺物が最も古いもので、残念ながらそれを遡る時期の遺物は出土しなかった。昆陽寺は、平安時代末期の説話集である「今昔物語」にも、釣り鐘を盗まれた話が載っており、奈良時代の遺物が出土しないまでも、少なくとも今昔物語にある平安時代の遺物や遺構が存在してしかるべきであろう。今後は、昆陽寺境内の調査を行い、昆陽寺の創建時期について検討していく必要がある。

最後に、焼土層について若干説明しておきたい。寺伝によると、天正七年(1579)、荒木村重の守る有岡城を攻めた織田信長の軍勢により、堂塔ことごとく焼き払われたという。確かに現在の建物はすべて江戸時代の建立である。焼き打ちの時期と焼土層の時期がほぼ一致することから、今回検出した焼土層がこの時のものである可能性が高いのである。(小長谷)

Ⅲ－２ 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第102次調査

所在地 伊丹市宮ノ前1丁目91－9

調査面積 16㎡

調査期間 平成3年6月25日～6月27日

調査概要 今回の調査は、個人住宅建設に伴って実施した有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査である。調査地点は、有岡城惣構えの中で北西部に位置し、当時の町屋(城下町)に該当する。しかし、町屋の中心部ではなく、当時の町屋の範囲からは西側に少し外れている。江戸時代の伊丹郷町になっても、中心部の道路に平行した一筋西側の道に面している。

発掘調査の範囲は敷地に合わせて、東西に長い調査区を設定した。調査区の規模は、南北2m、東西8mである。調査に際して、表土は重機により除去し、遺構の検出は地山面上で行った。

遺構 合計9基の土坑を検出した。遺構は敷地の入口部分(東側)と奥側に分かれて分布している。各遺構の規模については、次の通りである。

土坑1は東西90cm、南北136cm、深さ70cm。土坑2は径18cm、深さ18cm。土坑3は、調査区外に延びており全体の規模は明らかではない。東西の検出長は74cm、南北の検出長は20cm、深さ17cm。土坑4は東西40cm、南北50cm、深さ17cm。土坑5は東西76cm、深さ15cm。土坑6は南北24cm、深さ18cm、遺構の東側は調査区外に延びている。土坑7は、径20cm、深さ17cm。土坑8は、調査区北東隅に位置し規模不明。深さ36cmである。土坑9は調査区の南西隅に位置し規模不明。深さは17cmである。

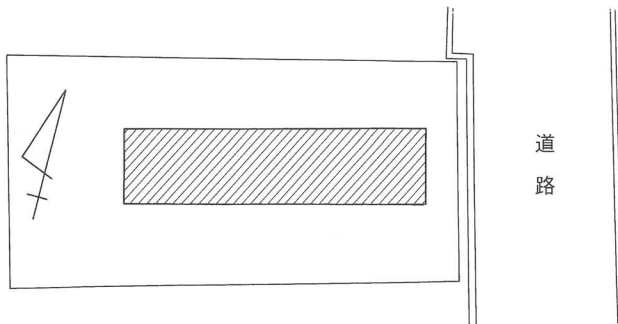


図8. 調査区設定図(1/200)



図7. 調査地点図(1/2,000)

各遺構の時期は、遺物を出土する遺構が少ないため不明確であるが、全体としては江戸時代の所産と考えられる。検出した遺構の中で、唯一まとまった遺物を出土した土坑

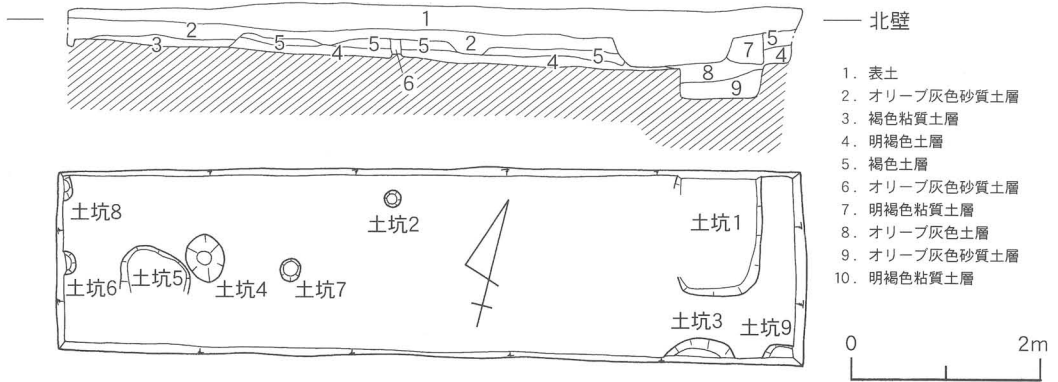


図9. 遺構図

1については、写真を掲載しているので説明しておきたい。(小長谷) 遺物 写真(1～6)は土坑1出土である。1は土師皿。灯明皿として使用されたため、口縁部の全体に煤の付着が見られる。底部は平坦部を形成し、緩やかに内湾して口縁部に至る。手づくね成形で作られ、内面には一定方向の丁寧なナデが施され、外面は指頭圧調整を行った後ナデ整形が施されている。2は瀬戸・美濃焼の陶器皿。



写真4. 調査区全景

体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に至って外反する。内面の全体と外面は口縁部付近まで淡い白黄色の灰釉が掛けられている。見込みには、型紙摺りの技法により、草花文の鉄絵が描かれている。体部外面には粗いヘラケズリの跡が明瞭に残る。高台は貼り付け高台である。3は陶器の灯明皿である。内面には菊文の浮彫が貼付され、見込みには二本の線刻が施されている。口縁部の外面から内面にかけて灰釉が掛けられている。口縁部は内外面とも

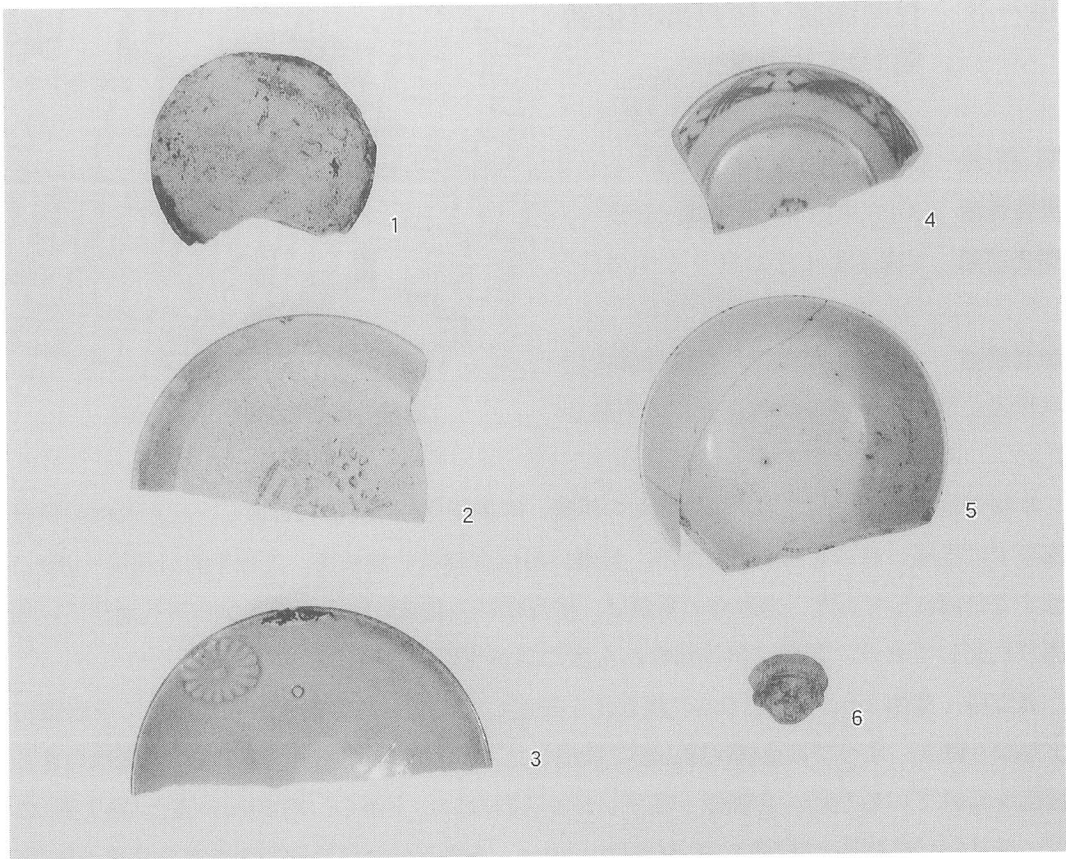


写真5. 出土遺物

に煤の付着が見られる。4は肥前青磁染付碗蓋。口縁部内面に斜格子文、天井部に手描きの五弁花文、つまみの内側に「渦福」の銘款が書かれている。5は肥前染付磁器碗。外面に二重網目文が描かれている。6は大黒天の土人形。(岡野)

小結 今回の調査では、有岡城に係わる時期の遺物は出土しなかった。調査範囲が狭いことも考慮しなければならないが、調査地点が当時の町屋の範囲から西に外れている可能性が高いと考えられる。これまでの有岡城跡の調査でも、現在の猪名野神社(当時は岸ノ砦)から南に延びる道筋より西側では、僅かに溝跡などが検出される他、建物跡などは検出されていない。今回の調査も同じ結果となった。

検出された遺構は江戸時代、伊丹郷町期の所産である。遺構の時期は、土坑1に見られるように江戸時代中期以降と考えられ、この時期に至って初めて、この場所が町屋に含まれるようになったことを示しているであろう。(小長谷)

Ⅲ-3 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第108次調査

所在地 伊丹市中央2丁目8-17
 調査面積 20㎡(東西2m 南北10m)
 調査期間 平成4年4月21日～4月24日

調査概要 今回の調査は、店舗付個人住宅建設に伴い、その事前調査として実施した。

本調査地点は、有岡城期には惣構えの西側、町屋側(城下町側)に位置し、江戸時代の伊丹郷町では昆陽口村の北西隅にあたる。昆陽口村は有岡城の廃城後、文禄年間(1592～96)にはすでに成立していた。当地点の東側は、伊丹郷町の北端の猪名野神社から南へ延びている通りに面しており、北側は伊丹郷町から西に向かう昆陽口通に面している。

調査は、東西2m、南北10mの調査区を設定して実施した。表土から地山までを重機により取り除き、すべての遺構は地山面で検出した。基本的な層序は、調査区の南側は大きく攪乱を受けているため、北側の一部でしかみられない。上から、約40cmの表土(第1層)の下にオリーブ褐色粘土層(第6層)が約10～20cm、その下には整地層で明黄褐色粘質土層(第7層)が約10cm、さらにその下には黄褐色粘

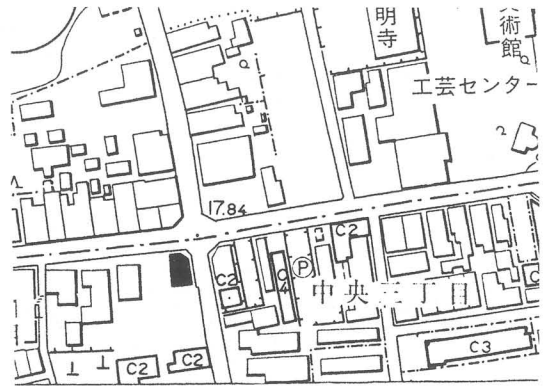


図10. 調査地点図(1/2,500)

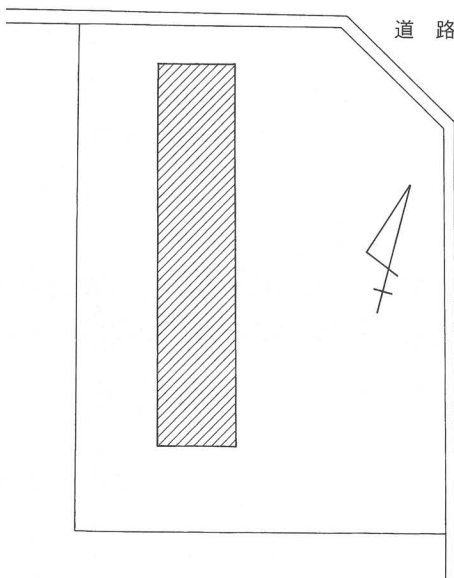
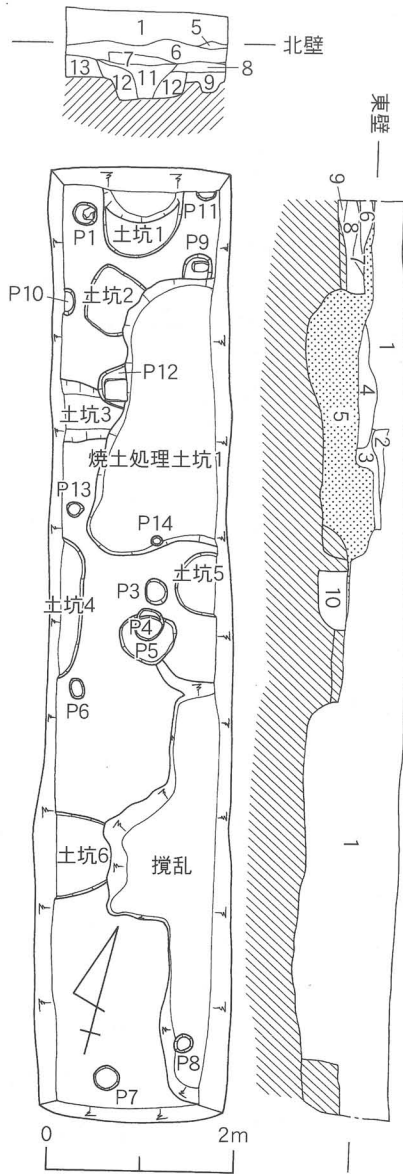


図11. 調査区設定図(1/200)

土質層(第8層)が約10cm堆積している。表土から60～75cmで地山面に達する。

遺構 検出した遺構は、柱穴14基、土坑6基、焼土処理土坑1基である。これらの遺構からは焼土処理土坑1を除いて、遺物はほとんど出土しなかった。焼土処理土坑は火災の後始末をするために掘られた土坑である。焼土のほか焼けた瓦や壁土等、火災の時に焼成を受けたものなどが出土する。円形または大型のものは方形の掘り方をしているのが特徴である。焼土処理土坑1は方形の掘り方をしていて、東西検出長1.35m、南北2.8m、深さ55cmを測る。埋土は焼土で、炭、焼土のブロッ



1. 表土
2. 10Y R 5 / 8 黄褐色粘質土層
3. 10Y R 4 / 4 褐色粘質土層
4. 2.5Y 6 / 6 明黄褐色粘質土層
5. 焼土層
6. 2.5Y 4 / 6 オリーブ褐色粘質土層
7. 2.5Y 6 / 8 明黄褐色粘質土層
8. 2.5Y 5 / 6 黄褐色土層
9. 2.5Y 5 / 6 黄褐色粘質土層
10. 10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色粘質土層
11. 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色粘質土層
12. 2.5Y 5 / 4 黄褐色粘質土層
13. 10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色粘質土層

図12. 遺構図

ク、瓦等を含む。出土遺物は図13(1~4)と写真8・9-1~4に示したように土師皿、焙烙、唐津系の刷毛目鉢、丹波焼壺、土師質十能、丹波焼播鉢、陶器皿のほか、図示はしていないが色絵磁器碗や陶器の碗等、中には火を受けたものもあり、時期は17世紀後半と考えられる。このほかに遺物の出土した遺構は土坑4と土坑5である。土坑4は西壁に切られていて規模はわからないが、深さ35cmを測る。瓦と18世紀中頃の肥前染付磁器皿片が1点出土した。土坑5は円形で、径65cm、深さ30cmを測り、埋土はにぶい黄褐色粘土層である。土師皿の小片が若干出土した。柱穴14基検出したが、このうち根石をもつものは柱穴9と柱穴12である。柱穴9は径33cm、深さ24cmの掘方で、根石は角石、長辺18cm、短辺10cmを測る。柱穴12は径45cm、深さ7cmの掘方で、根石は正方形をしていて、一辺が25cmを測り、五輪塔の火輪を転用して、逆さに設置したものである。(細川)

遺物 焼土処理土坑1(図13-1~4、写真8・9-1~4)1は土師皿である。口径10.8cm、器高1.8cmを測る。内外面ともナデて仕上げるが、外面



写真6. 焼土処理土坑1(西より)

の指頭圧痕が残る。口縁端部に僅かに煤が付着し、灯明皿としての使用が考えられる。灰黄褐色を呈し、胎土は精良である。2は口径24.4cmの焙烙である。口縁端部は内傾し、内側に肥厚する。内面は平滑に仕上げられているが、外面は底部と体部との繋ぎ目に粘土紐痕が残る。屈曲部には煤が付着し、底部は焦げている。橙色を呈し、胎土はウンモ、砂粒を含む。3は唐津焼系の刷毛目鉢。口径23.0cm、器高11.4cm、高台径10.0cmを測る。口縁端部は玉縁状となる。高台は深く削り込んだ削り出し高台で、その為に底部器壁は薄く仕上がっている。口唇部内外面と体部下半には鉄釉が掛かる。体部上半には波状の白泥釉の上に3条の鉄釉が残り、内面は底部から捲線状に白泥釉を施す。胎土は鈍い赤橙色を呈

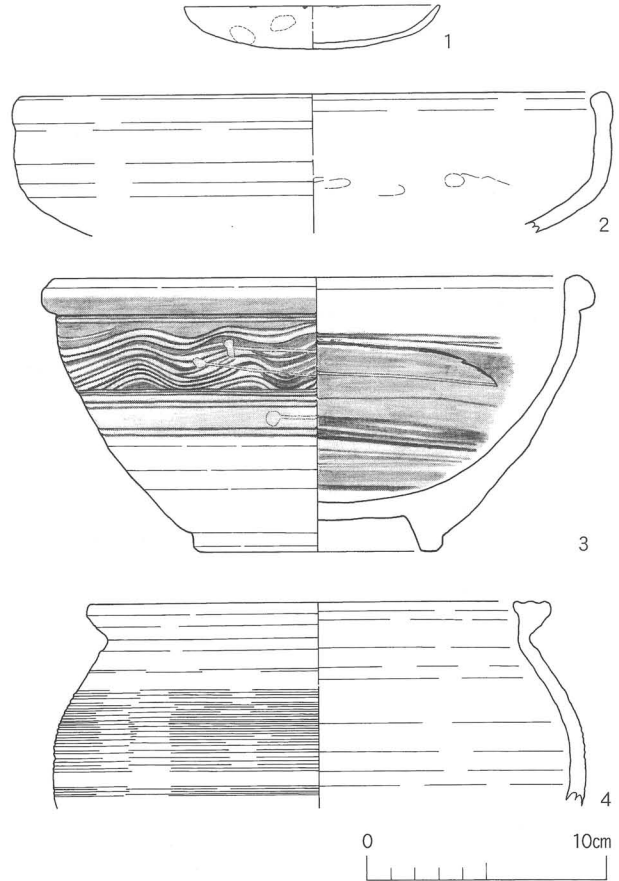


図13. 出土遺物実測図(焼土処理土坑1)

し、緻密である。4は口径19.0cmの陶器甕である。口縁部は前後に拡張し、上端は凹線を2条巡らす広い水平面を持つ。体部はカキ目状の凹線が巡り、内外面に鈍い赤褐色釉を掛ける。丹波焼か。写真8・9-1は陶器皿。口縁部外面に白色釉、全体に薄く透明釉が掛かる。胎土は鈍い橙色を呈する。2は唐津焼系の刷毛目碗。火を受けた為、白泥釉が変色し、器壁に貫入が入る。3は丹波焼播鉢。口縁端部を外方に強くナデて、同内面に内傾する面と稜をもつ。4は土師質の十能である。17世紀後半の所産であろう。(瀬川)

小結 当地点からは有岡城期の遺物は全く出土しなかった。検出した焼土処理土坑1は江戸時代前期の火災の跡である。この火事は、古野将盈編「有岡庄年代秘記」に記載のある「元禄十五年三月三日中少路村より出火北之口町へ焼拔、竈数及四百三十九軒」に該当すると考えられる。元禄十五年(1702)の火事は、当地点の南側の中少路村より出火し、伊丹郷町の北東端の北之口町にかけて439軒焼けたとあり、この辺り一帯に被害をもたらした大火災である。また、このような焼土処理土坑は、伊丹郷町では屋敷地内から発見されるが例が多いこ



写真7. 調査区全景(南より)

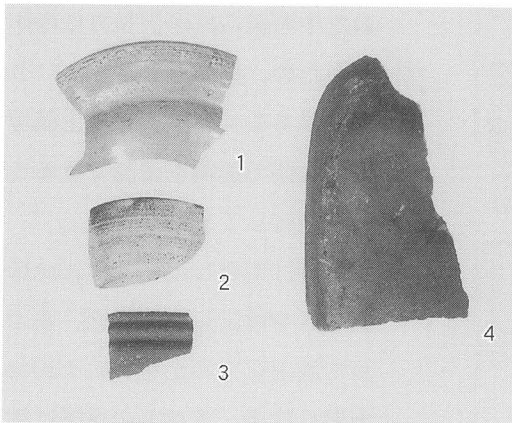


写真8. 出土遺物(外面)

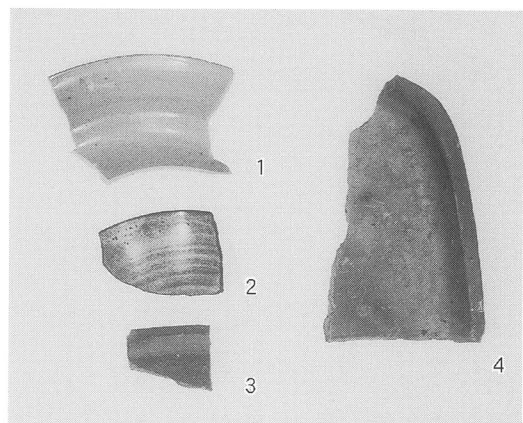


写真9. 出土遺物(内面)

と、柱穴を多数検出したこと、そして、「元禄七年柳沢吉保伊丹郷町絵図」をみると、当敷地内に2軒の家があり、南北に走る道路に面した方に入口があったことがよみとれることにより、当地点には元禄年間当時建物が存在していたことがいえる。

本書では、第121次、第128次、第132次調査で火事跡が検出されており、元禄時代の大火が広範囲に及んでいたことが明らかになってきた。(細川)

Ⅲ－４ 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第118次調査

所在地 伊丹市中央6丁目3-3
 調査面積 30㎡(東西1.5m 南北20m)
 調査期間 平成5年2月16日～2月22日

調査概要 今回の調査は、寺院の庫裏建設に伴う緊急発掘調査として実施した。

調査地点の墨染寺境内には、「女郎塚」という石碑が残り、その側面には、「天正七年己卯十二月十三日落城」の文字が刻まれている。当地点は、上臈塚砦跡の推定地でもある。上臈塚砦は有岡城惣構えの中央部西辺に位置し、

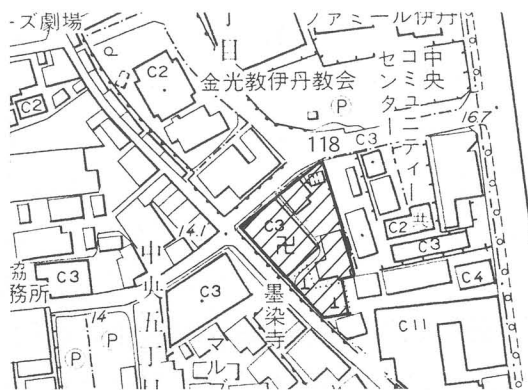


図14. 調査地点図(1/2,500)

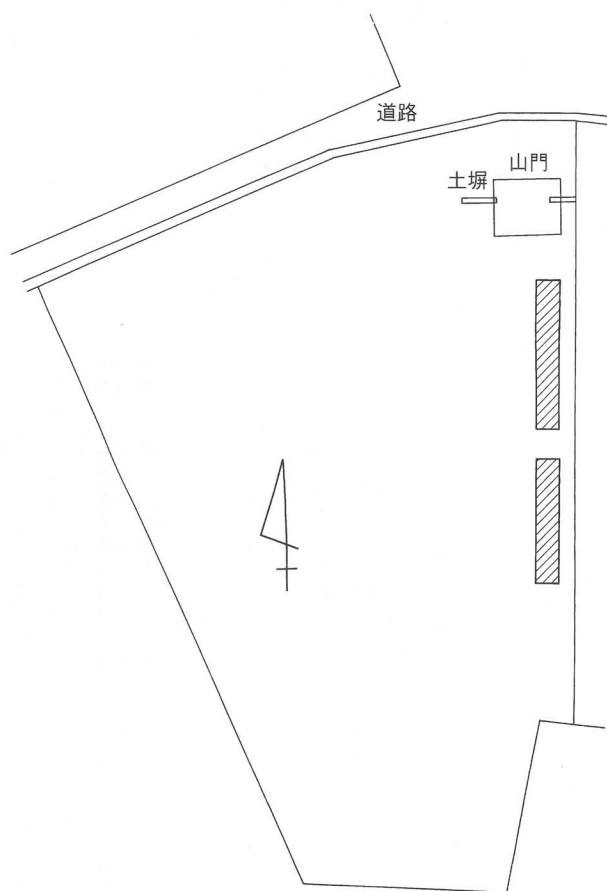


図15. 調査区設定図(1/500)

惣構えの北端の岸の砦、南端の鴨塚砦とともに、有岡城惣構えの要所の一つであった。織田信長が天正六年(1578)から有岡城を攻撃したが、上臈塚砦を守っていた中西新八郎が信長方に内応したため、落城を早めたという記録がある。発掘調査で上臈塚砦跡関連の遺構を確認できることを期待してあった。

調査は東西1.5m、南北20mの調査区を設定し実施した。表土から地山までの土を70～130cmを取り除き、すべての遺構は地山面で検出した。なお、調査区中央部に止水栓があったため、この部分を避けて、北側トレンチ、南側トレンチに分けて調査した。

遺構 検出した遺構は、両トレ

ンチ合わせて 土坑11基、柱穴(P)17基、埋甕2基である。これらの遺構からは、土坑5、土坑7、P4を除いてほとんど遺物は出土しなかった。地表面が北側から南側へと低くなっていき、その差は50cmを測るが、地山面では大差はない。

北側トレンチでは、表土から80~120cmの深さまで攪乱を受けている。トレンチの中央から北側では焼土層(第7・10・11層)がみられるが、時期は不明である。柱穴4は径50cmの掘り方で、一辺30cmの根石をもつ。肥前染付磁器の小片が1点出土した。埋甕1・2は陶器の甕の底部で、上部は失われていた。伊丹郷町では19世紀中頃以降、このような陶器の甕を便所として使用されていた例がみられる。

南側トレンチでは表土から25~70cmの深さまで攪乱を受けている。トレンチの北側では

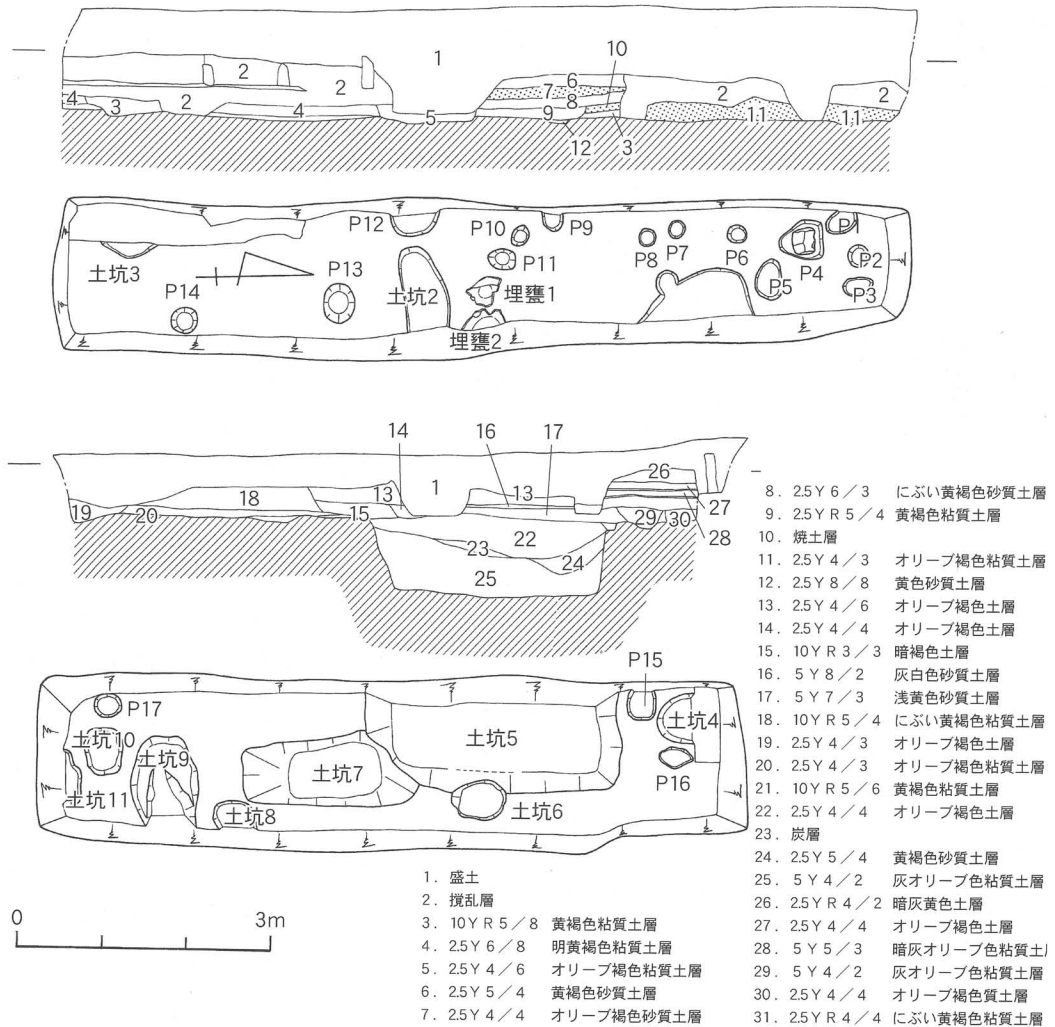


図16. 遺構図 北側トレンチ(上)・南側トレンチ(下)

土間(生活面)を3面検出した。表土から40cm、50cm、60cmの深さのところ土間がそれぞれ存在する。土坑5は方形で、東西検出長1.1m、南北3m、深さ95cmを測る。埋土は底に5～15cm大の礫を含む灰オリーブ色粘質土層(第25層)が50～70cm堆積し、その上に黄褐色砂質土層(第24層)が20cmと、炭層(第23層)が10cm、さらにその上にオリーブ褐色土層(第22層)が20～40cm堆積している。土坑6は楕円形で、東西48cm、南北80cmを測り、柱穴15と同様に瓦溜りである。土坑7は長方形で、東西80cm、南北2.1m、深さ30cmを測る。土坑5、土坑7からの出土遺物は江戸時代後期のものと考えられる。

遺物 図示していないが、P4からは肥前染付磁器碗の小片が出土した。土坑5からは土師



写真10. 土坑7(北東より)



写真11. 調査区遠景(北より)

皿、透明釉を施した糸切底の灯明皿、肥前染付磁器碗(柳文)等、土坑7からは土師皿、肥前染付磁器碗、丹波焼甕等が出土した。これらは18世紀後半から19世紀前半のものと考えられる。また、重機掘削中に寛永通宝と墨染寺の紋の入った瓦が出土した。

小結 当地点は有岡城期には上臈塚砦があったとされるところであり、また当地点にある墨染寺の開基は、「丹丘寺院開基年考」によると天正十八年(1590)とあるが、このことを示す遺構・遺物は発見できなかった。検出した土坑からは江戸時代後期と考えられる遺物が出土し、江戸時代前期以前に遡る遺物は出土しなかった。数多くの柱穴を検出したが調査範囲が狭いため、どのように建物が建っていたかはわからない。(細川)



写真12. 北側トレンチ全景(北より)



写真13. 南側トレンチ全景(南より)

Ⅲ－５ 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第121次調査

所在地 伊丹市中央3丁目398-1

調査面積 90m²

調査期間 平成6年6月3日～6月11日

調査概要 今回の発掘調査は、店舗付個人住宅建設に伴う発掘調査として実施したものである。

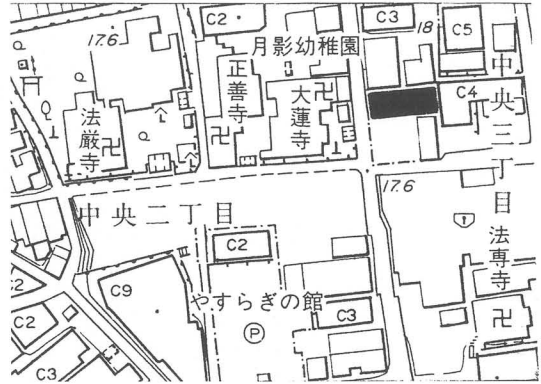


図17. 調査地点図(1/2,500)

調査地点は、有岡城の城下町の範囲に該当し、当時の城下町を南北に通る主要道路に面している。城下町の主要道路、とくに南北方向の道路は二本あるが、その内の西側の道路に面しており、調査地点の西側には、法巖寺、正善寺、大蓮寺などの寺院が集まっている、いわゆる寺町がある。

当地点の敷地は東西方向に長く間口は狭い。調査範囲は、敷地に合わせて南北5m、東西18mとした。近辺のこれまでの調査では、南北方向の小規模な堀が発見されており、今回の調査範囲にその堀が延びていることが予想された。

遺構 今回の発掘調査により検出した遺構は、有岡城(伊丹城)に関係する小規模な堀跡、江戸時代の井戸3基、火災によって生じた焼土を瓦や陶磁器とともに埋め込んだ焼土土坑2基、土坑23基、礎石1基、柱穴7基、溝1条である。

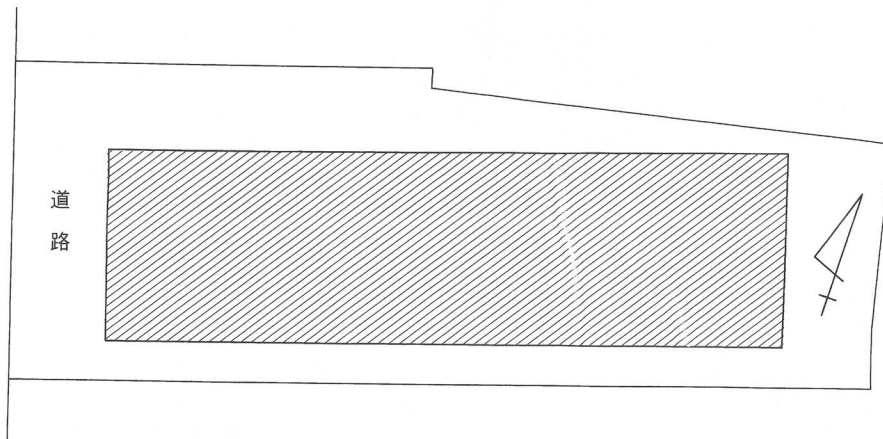


図18. 調査区設定図(1/200)

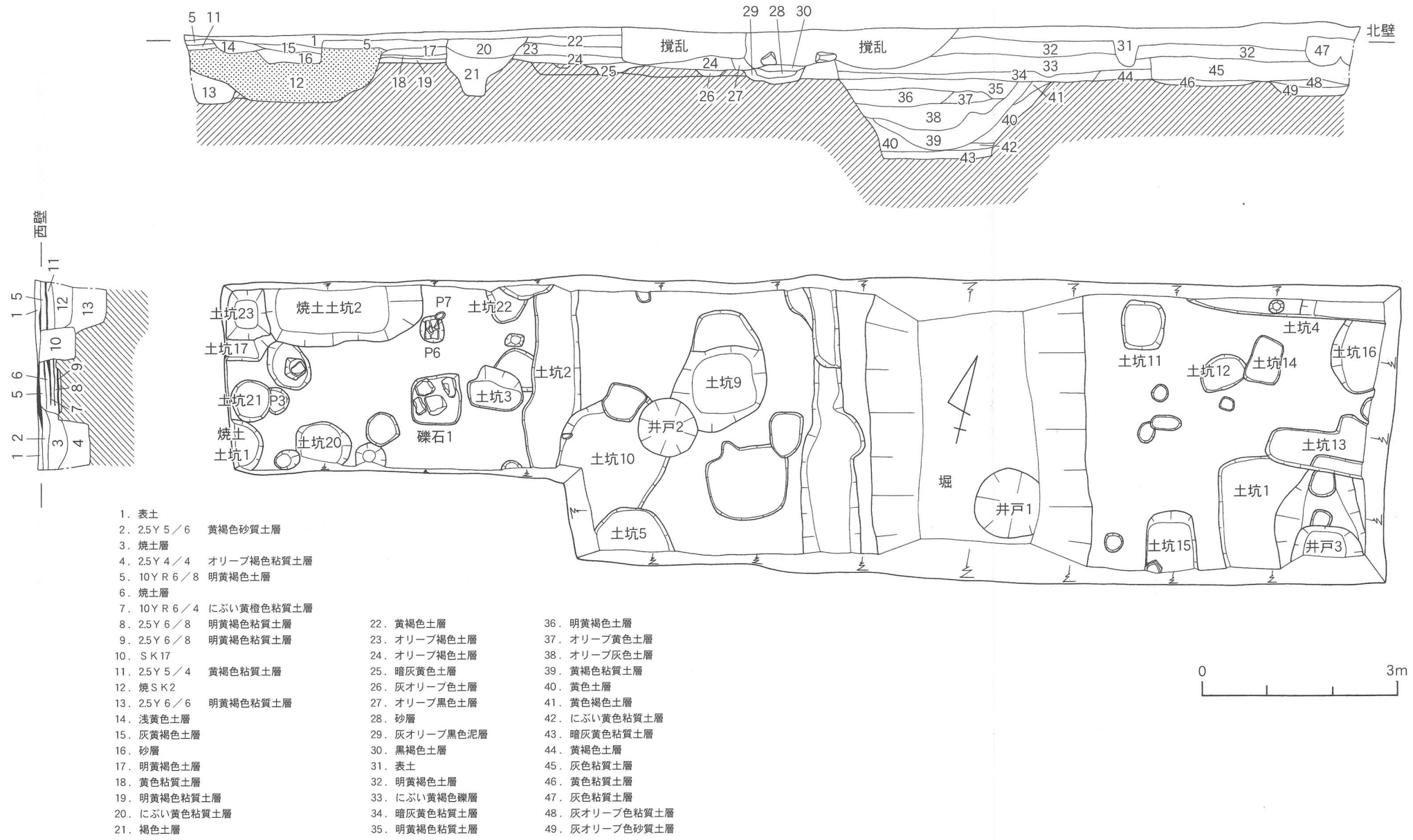


図19. 遺構図

堀跡は、調査区の中央やや東寄りに位置し、南北方向に延びている。堀は、幅3.4m、深さ1.7mの規模で、延長4.7mにわたって検出した。堀の断面形は、逆台形状を呈しており、底は平坦面を成している。埋土の状況から、一度に埋め戻された形跡がある。出土遺物は少なく、備前焼の甕の口縁部片等が少量出土したのみである。今回検出した堀跡は、昭和63年に実施した第58次調査検出の堀に繋がると考えられる。遺構の時期は16世紀後半と推定される。

江戸時代の遺構の中で、建物跡に関する遺構としては礎石1があるが、調査区が狭いことから規模などは不明である。井戸跡は3基検出しているが、この内、井戸2・3は近代の遺構で、井戸3が江戸時代後期の遺構である。

焼土土坑2からは、火災で焼けた壁土、瓦、陶磁器が出土している。こうした焼土土坑は、伊丹郷町の各所で検出されており、文献に残る江戸時代の火事との関連が注目される。その他の土坑については、紙面の関係で詳述できないが、遺物が出土した遺構についてのみ、遺構の時期を説明しておきたい。17世紀前半～中頃の遺構には、土坑1・9・16・17・19・20・23などがあり、17世紀後半から18世紀前半の遺構には、土坑2・15、18世紀後半以降の遺構には、土坑4・22がある。

遺物は、主に江戸時代の陶磁器が出土した。その一部ではあるが、まとまった遺物を出土した二つの遺構について図示して説明しておきたい。 (小長谷)

遺物 土坑20(図20-1~6) 1は土師皿。口径6.2cm、器高1.6cmを測る。口縁部には煤が厚く付着し、灯明皿として使用されたことがわかる。浅黄橙色を呈し、胎土のきめは細かい。2は瀬戸・美濃焼の天目碗。口径12cm。体部は直線的に広がり、口縁部は小さく外反する。内外面に鉄釉を施す。3は染付網目文碗。口径11cm、器高7.1cm、高台径4.6cmを測る。腰部



写真14. 堀(南より)

から直線的に立ち上がる体部をもつ深手の碗である。高台下半部から内側は無釉。内外面は釉の掛かりが薄いため、所々に素地が見える。釉色は黄味を帯び、貫入が入る。4~6は丹波焼の播鉢。4は口径22.4cm、器高9.1cm、底径19.9cmを測る。底部から直線的に立ち上がるが、口縁部に

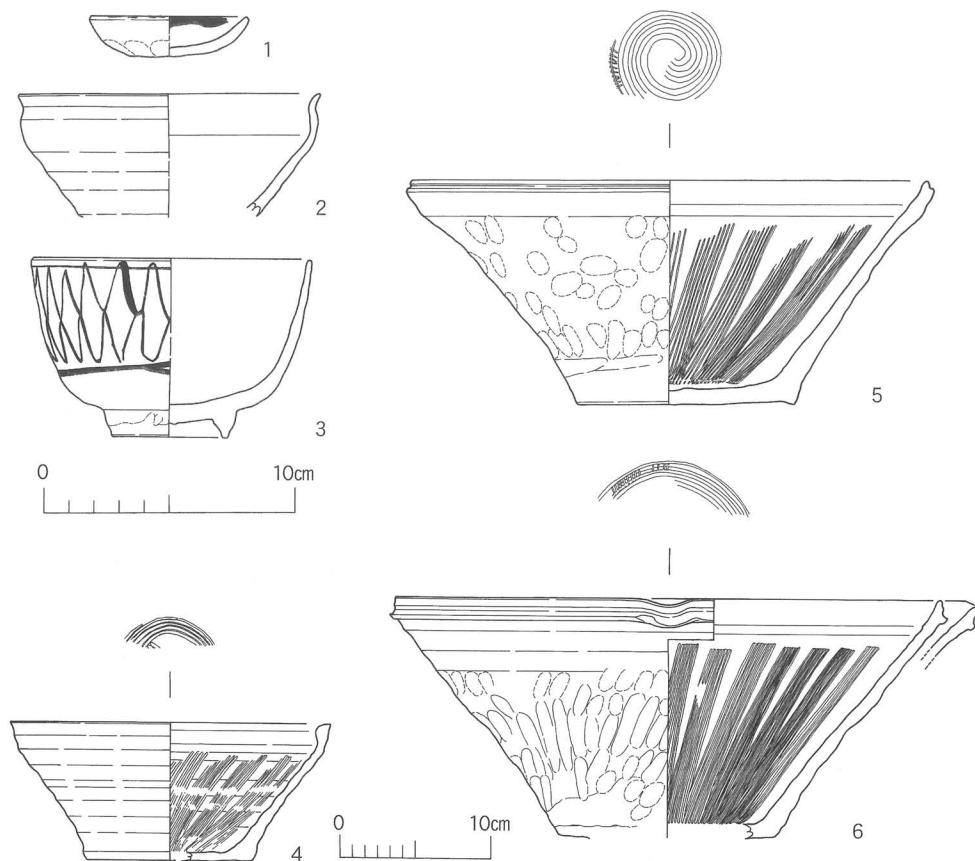


図20. 出土遺物実測図(土坑20)

いたり僅かに内湾する。口縁端部は内側に肥厚する。拵目は6本1単位で、見込みには外周の拵目が施されている。体部の整形に指オサエはみられず、全体にロクロ目が残る。無釉の焼締めで、鈍い赤褐色を呈す。石英、長石、2～3mmの砂粒を含む粗い胎土である。5は口径34cm、器高14.7cm、底径14.2cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はそのまま切り離れた形を呈している。口縁上端面には1条の沈線が巡り、口縁部の内面にも浅い凹線が巡る。拵目は、8本1単位で、見込みは渦巻状に施している。体部外面は指オサエの痕が顕著に残る。無釉の焼き締めで、胎土は橙色を呈す。6は口径36cm、器高15.7cm、底径14.4cmを測る。直線的に立ち上がる体部は、先端部で水平方向に拡張され断面三角形の縁帯を成す。縁帯の外面には沈線が巡り、内面にも弱い幅広の凹線が巡る。拵目は7本1単位で、全体で41単位の拵目が施されている。体部外面には指オサエが顕著に残るが、口縁部周辺ではナデにより消している。赤褐色を呈し、胎土には石英、長石を多く含む。土坑20出土の遺物の時期は、17世紀前半～中頃と考えられる。

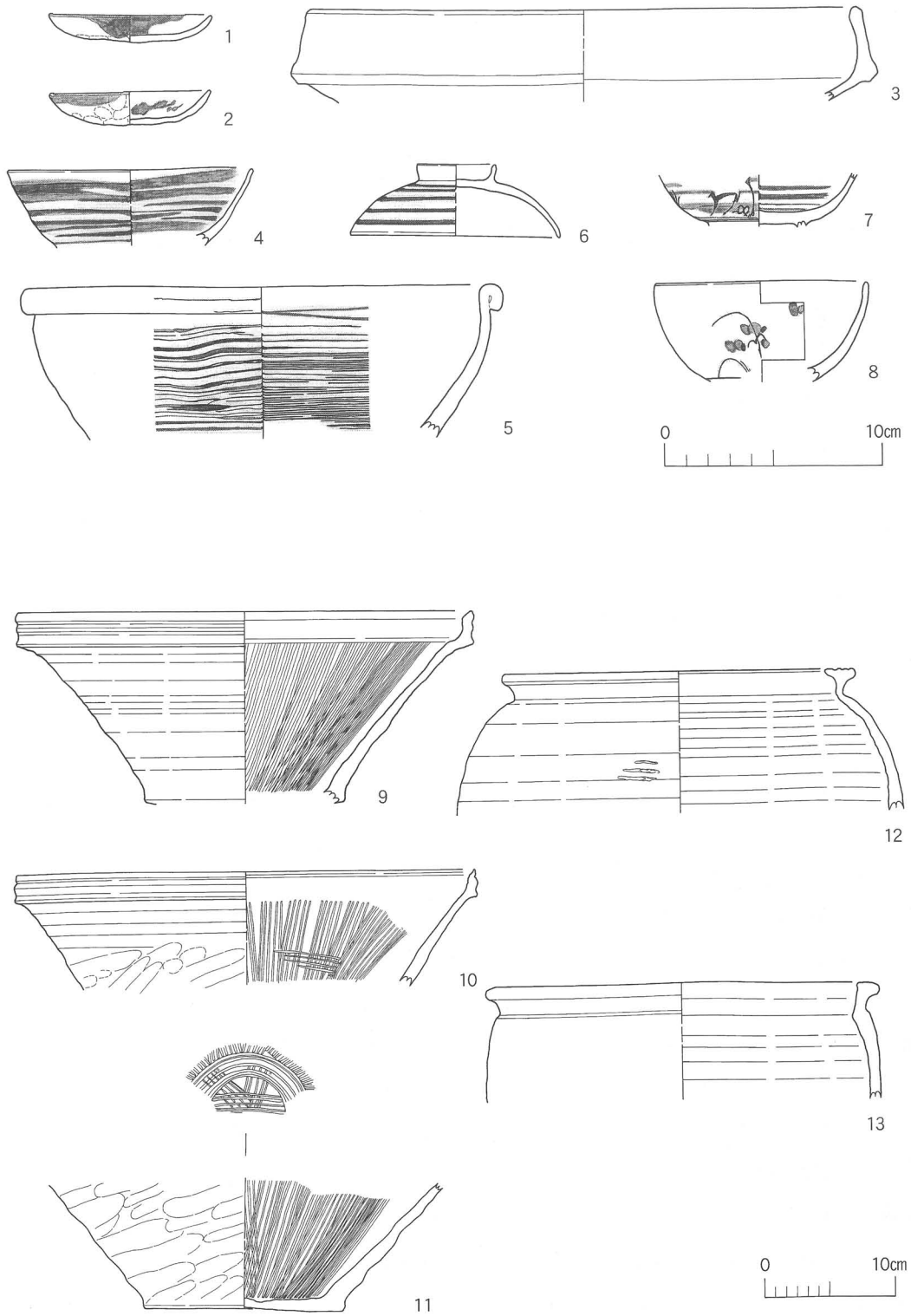


图21. 出土遺物実測図(焼土土坑2)

焼土土坑2(図21-1~13)1・2は土師皿。口縁部に煤の付着があり、灯明皿であることがわかる。1は口径7.6cm、器高1.3cm、2は口径7.4cm、器高1.5cmを測る。ともに外面には指頭圧痕が残る。3は焙烙。口径25.4cm。内傾する口縁部を持ち、底部との境には断面台形の稜を有す。口縁部はヨコナデが行われ、平滑に仕上げられている。4は唐津焼の刷毛目碗。口径11.2cm。口縁部は外反気味に立ち上がる。5は唐津焼の鉢。口径21.6cm。口縁端部を外側に巻き込んで玉縁口縁を造っている。赤褐色の地肌に白色泥釉により刷毛目を描き、その上から透明の釉を内面の全体と外面は口縁部下まで施している。6は色絵磁器碗の蓋。口径9.6cm、器高5.3cmを測る。文様は横縞文を赤絵により描いている。7は唐津焼の碗。内面から高台内側まで白色泥釉により刷毛目を施し、外面腰部には暗緑色の釉により草花文を描いている。8は染付草花文碗。口径は9.7cm。9~11は丹波焼の播鉢。9は口径34.8cm、器高14.5cm、底径15.3cmを測る。体部は直線的に立ち上がり口縁部下で強く外反した後、直立して広い縁帯を形成している。縁帯の外面には明瞭な凹線が巡っている。播目は9本1単位として、密に施されている。体部の外面にはロクロ目が残り、指オサエは全く認められない。器表面は赤褐色を呈し、胎土には石英・長石などを含み粗い。10は口径35cm。直線的に開いた体部に直立する広い縁帯がつづく。縁帯の外面には明瞭な凹線が巡る。口縁端部は細くつまみ上げられ、内面には2条の浅い沈線が巡っている。播目は5本1単位であるが、各単位の幅は一定ではない。また、播目の中ほどには横方向に一描きしている。体部外面の下部には指オサエ痕が残る。器表面は鈍い赤褐色を呈し、胎土中に石英・長石などを含み粗い。11は底部。底径は15.2cm。播目は5本1単位。播目は10と同様に均等な幅をもたない。体部は連続した斜方向のナデを施している。表面は赤褐色を呈し、自然釉が掛かる。12・13は丹波焼の甕。12は口径26.7cmを測る。張りのある肩部から頸部が垂直に立ち上がり、口縁部は内外に拡張されて広い平坦面を形成する。口縁端部には3条の沈線が巡る。口縁部の内面から外面にかけて赤褐色の鉄釉が掛けられている。胎土は石英・長石を含み粗い。13は口径28.6cmを測る。張りのない肩部から頸部が短く立ち上がり、口縁部は外側に強く拡張され上端部に平坦面を形成している。胎土は赤褐色を呈する。本遺構出土の丹波焼播鉢(9~11)の口縁部の形態および製作技法は、土坑20出土のものより後出の特徴を有しており、肥前磁器や唐津焼刷毛目碗など共伴遺物から見て、本遺構の時期は17世紀後半から18世紀初頭頃と推測される。(瀬川)

小結 今回の調査検出の堀跡は、昭和63年に実施した第58次調査検出の堀跡の延長部にあたる。前回検出の堀跡の規模が、幅3.5m、今回検出の堀跡が幅3.4mとほぼ同規模であり、調査地点西側の道に平行する方向で南北に延びている。こうした小規模な堀跡は、有岡城跡主郭部の周辺に所在した侍町において多数検出されているが、町屋(城下町)の範囲で検出さ



写真15. 調査区全景(東より)



写真16. 調査区西側(南より)

れることは少なく、今回検出の堀跡以外には第32次調査等に検出例があるだけである。現在のところ、町屋の範囲に堀割りが存在していたという証拠はなく、今回検出の堀の性格については不明である。

江戸時代の遺構には、焼土・炭・焼け瓦などを廃棄した土坑がある。こうした土坑は、火災によって生じた塵灰の地下埋納土坑と考えられ、伊丹郷町の各所で検出されている。今回の調査では、2基(焼土土坑1・2)検出されている。いずれの土坑も調査区の西端に位置し、全体が検出されていないが、土坑の内部から陶磁器が多数出土している。焼土土坑2から出土した遺物は、17世紀後半から18世紀初頭の時期と考えられる。(小長谷)

Ⅲ－6 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第128次調査

所在地 伊丹市宮ノ前3丁目59-1
調査面積 24㎡(東西12m 南北2m)
調査期間 平成5年8月19日～8月21日

調査概要 今回の調査は、個人住宅の建設に伴い、緊急発掘調査として実施した。

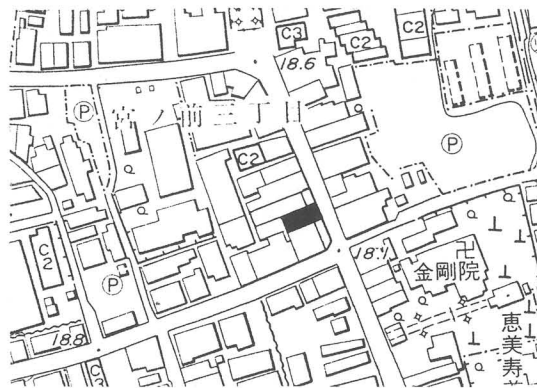


図22. 調査地点図(1/2,500)

本調査地点は、有岡城期には惣構えの西側、町屋(城下町)側に位置し、江戸時代の伊丹郷町では北少路村に属している。当地点は、伊丹郷町の北端に鎮座する猪名野神社から南へ延びる道路に面している。この道路は絵図をみると江戸時代から変わっていない。猪名野神社境内には今でも西辺から北辺にかけて土塁が残っており、有岡城惣構えの北端を守る岸の砦跡にあたとされている。当地点は猪名野神社境内から南へ約150mのところである。

重機により表土を取り除き、すべての遺構は地山面で確認した。地山面までの深さは、道路に面した東側では8～10cm、敷地の奥の西側では40cmを測る。

遺構 検出した遺構は、焼土処理土坑1基、土坑11基、柱穴3基である。このうち主な遺構について説明することにする。

調査区西側の土坑7は、方形で、検出長は東西1.3m、南北80cm、深さ40cmを測り、埋土はオリーブ褐色砂質土層である。遺物は図25(1～5)に示したように、砂目積の唐津焼皿、焙烙、肥前染付磁器皿・碗(網目文)等、17世紀中頃と考えられるものが出土した。道路に近い調査区東側の焼土処理土坑1は、方形で、検出長は東西2.5m、南北1.7m、深さ45cmを

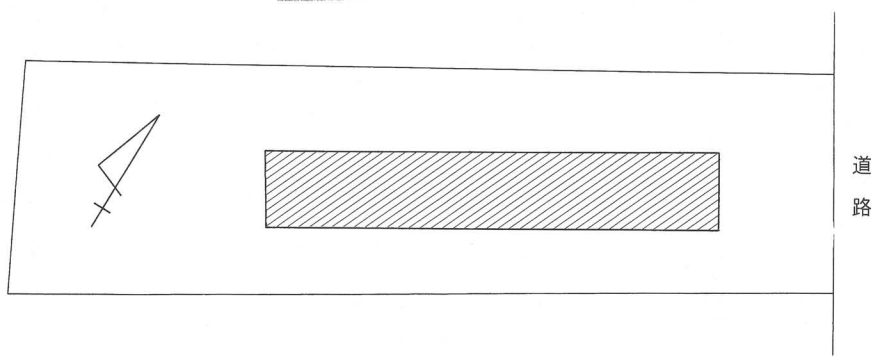
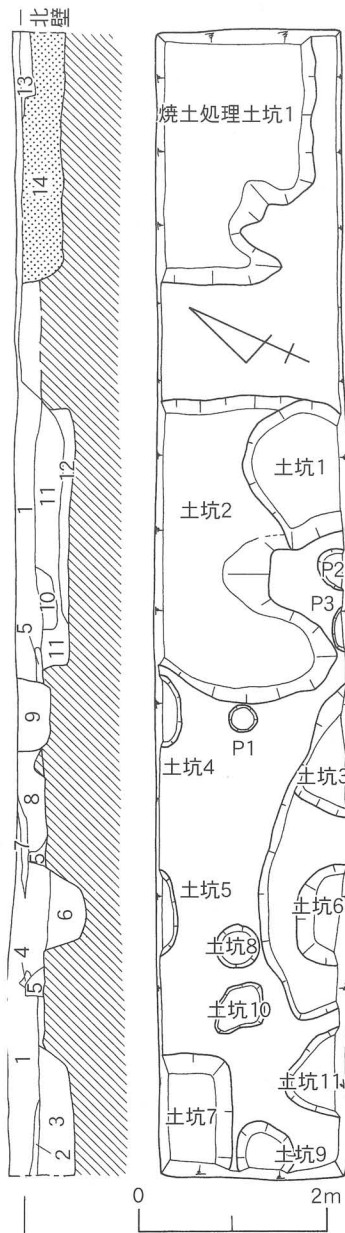


図23. 調査区設定図(1/200)



- | | |
|-------------------------|-------|
| 1. 表土 | 2. 漆喰 |
| 3. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色砂質土層 | |
| 4. 10Y R 4/6 褐色粘質土層 | |
| 5. 7.5Y R 5/8 明褐色粘質土層 | |
| 6. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂礫層 | |
| 7. 2.5Y 8/4 淡黄色砂質土層 | |
| 8. 2.5Y 5/6 黄褐色粘質土層 | |
| 9. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色砂質土層 | |
| 10. 2.5Y 6/8 暗灰黄色細砂礫層 | |
| 11. 10Y R 4/3 明黄褐色粘質土層 | |
| 12. 5Y 4/2 灰オリーブ色粘質土層 | |
| 13. 5Y 5/3 灰オリーブ色粘質土層 | |
| 14. 焼土層 | |

図24. 遺構図

測り、埋土は焼土や炭に混じり焼けた瓦等を含む。遺物は少量で、図25-6の肥前白磁小坏等17世紀後半と考えられるものが出土した。土坑2は不整形で、東西3.2m、南北検出長1.9m、深さ35cmを測り、埋土は底から瓦を多く含む灰オリーブ色粘質土層が10cm、その上に明黄褐色粘質土層が25cm堆積している。図示はしていないが、17世紀後半から18世紀前半の遺物が出土した。土坑5は大半が調査区外へかかっている、大きさは不明であるが、40cmの深さまで調査した。埋土は炭化物を多く含むオリーブ褐色砂礫層である。図示していないが、印判手の肥前染付磁器碗等、18世紀前半と考えられる遺物が出土した。このほかに図示はしていないが、遺物の出土した遺構は次のとおりである。18世紀前半の遺物が出土した遺構は土坑6、18世紀代の遺物が出土した遺構は土坑1、18世紀末から19世紀代の遺物が出土した遺構は土坑3、明治以降の遺物が出土した遺構は土坑9である。

(細川)

遺物 1～5は土坑7より出土した。1は唐津焼の皿で、口径12.6cm、器高3.0cmである。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。見込み部分は一段下がり、砂目跡が4カ所存在する。削り出し高台で、畳付は露胎である。灰白色釉を施している。2は土師質の焙烙で口径25.0cm、残存高5.6cmである。外型を使って製作した丸底から、口縁部は内傾して立ち上がる。口縁部外面は横ナデ調整、内面は指押えの後横ナデ調整を行う。3は肥前染付磁器皿で、口径13.0cm、器高4.1cmである。内面は蛇ノ目軸ハギで、畳付と高台内は露胎である。内面は葡萄文が施されている。外面は釉掛けが不十分で素地が見えている部分もある。4と5は肥前染付磁器碗で、4は推定口径9.4cm、残存高4.6cmである。外面は網目文を施している。焼成が不十分だったためか、胎土は黄橙色を呈し、呉須の発色も悪い。5は残

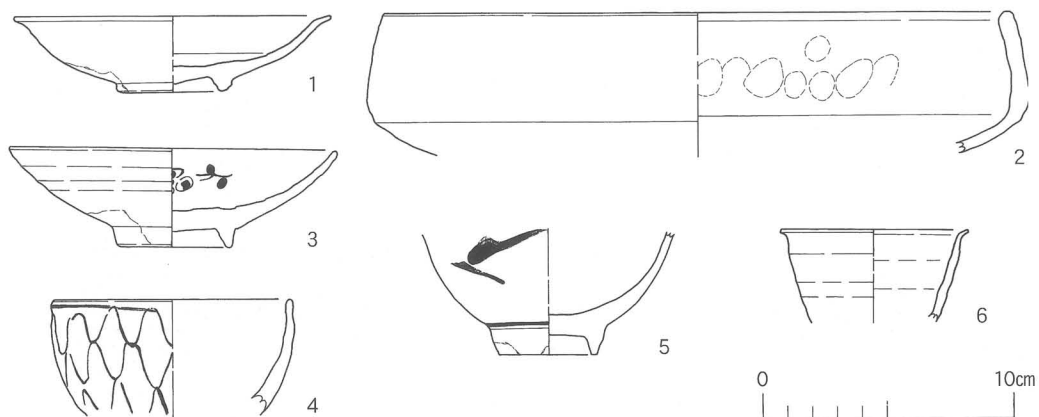


図25. 出土遺物実測図(土坑20)

存高 4.9cm、高台径 3.9cmで、外面に染付を施す。呉須の発色は淡く、体部を巡る圈線も1周しない。高台の断面は逆台形を呈し、畳付と高台内は露胎である。1～5は17世紀前半から中頃と考えられる。

6は焼土処理土坑1から出土した肥前白磁小坏で推定口径7.4cm、残存高3.7cmである。体部はほぼ直線的に開き、口縁部でわずかに外反する。釉は内外面共に施されている。17世紀後半と考えられる。
(岡野)

小結 調査地点からは有岡城期に遡る遺物は全く出土せず、土坑7のように江戸時代前期と考えられる遺構が最も古い。焼土処理土坑1は火災の後、残滓を処理するために掘られた土坑で、このような土坑は伊丹郷町各所で発見されている。伊丹郷町では元禄年間(1688～1704)に3度大火があった。最初の火事は、元禄元年(1688)井筒町より出火し、160軒焼け、同十二年の火事は、天王町から出火し、札場の辻まで飛び火し下市場まで焼き、寺院六ヶ寺、酒家十六軒などが焼けている。そして同十五年の火事は、中少路村より出火し、北之口町まで439軒が焼けている。今回検出した焼土処理土坑1がどの火事に該当するかは難しいが、火事の方角性からみると元禄十二年か同十五年のどちらかの火事と思われる。

(細川)



写真17. 調査区全景(東より)



写真18. 焼土処理土杭 1 (北東より)

Ⅲ－7 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第132次調査

所在地 伊丹市宮ノ前2丁目5-3
 調査面積 50㎡(東西10m 南北5m)
 調査期間 平成6年1月18日～1月28日

調査概要 今回の調査は、個人住宅の建設に伴い、緊急発掘調査として実施した。

調査地点は、有岡城惣構えの西側、町屋(城下町)側にあたる。伊丹郷町を描いた「文禄伊丹之図」や「寛文九年伊丹郷町絵図」をみると、当地点の周辺に家並が描かれており、有岡城期からの町屋が残っていたと考えられる。

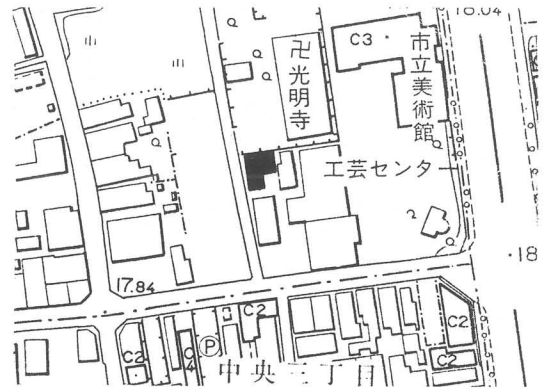


図26. 調査地点図(1/2,500)

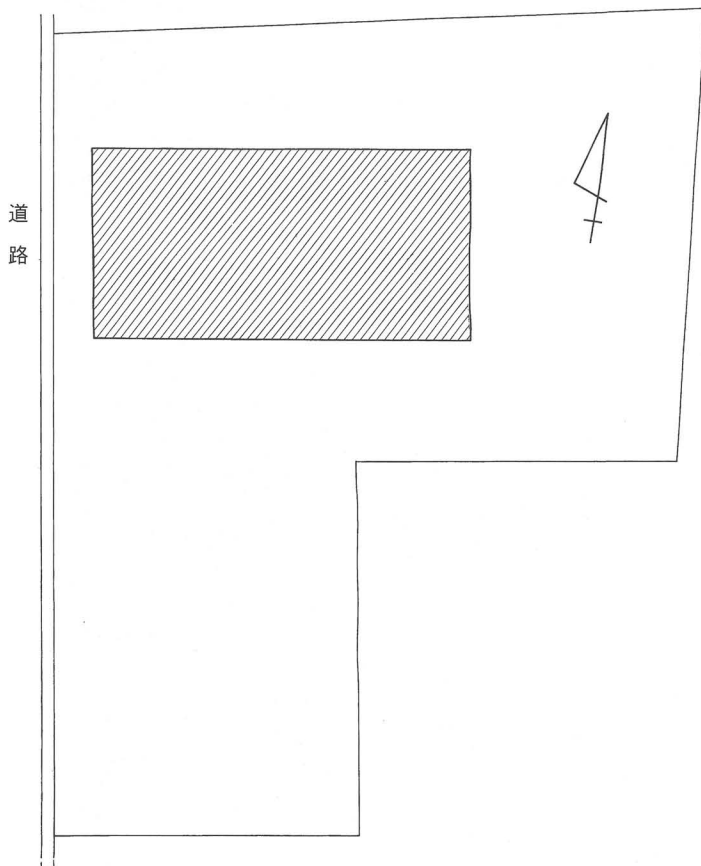


図27. 調査区設定図(1/200)

当地点は国指定の重要文化財、旧岡田家住宅の西側に隣接している。旧岡田家住宅は延宝二年(1674)建立で、建立当初から酒造蔵として使用されていたことが最近の調査でわかった。また当地点の北側には光明寺(有岡城跡第100次調査地点)がある。

重機により地山面までの土を除去し、地山面上で遺構検出を行った。敷地の西側に南北に通る道路があり、道路に面した方で表土から20cm下に土間(生活面)が存在する。その

下の整地層(第26層)を取り除くとまた土間にあたる。さらにその下の整地層(第27層)、そして暗オリーブ色粘質土層・オリーブ褐色粘質土層(第6・7層)を取り除くと、地山面にあたる。表土から地山面までは90~100cmを測る。また、焼土層は表土の下の第8層と地山面上の第15層の2層検出した。

遺構 検出した遺構は、井戸1基、焼土処理土坑3基、土坑17基、柱穴3基、溝1条、石

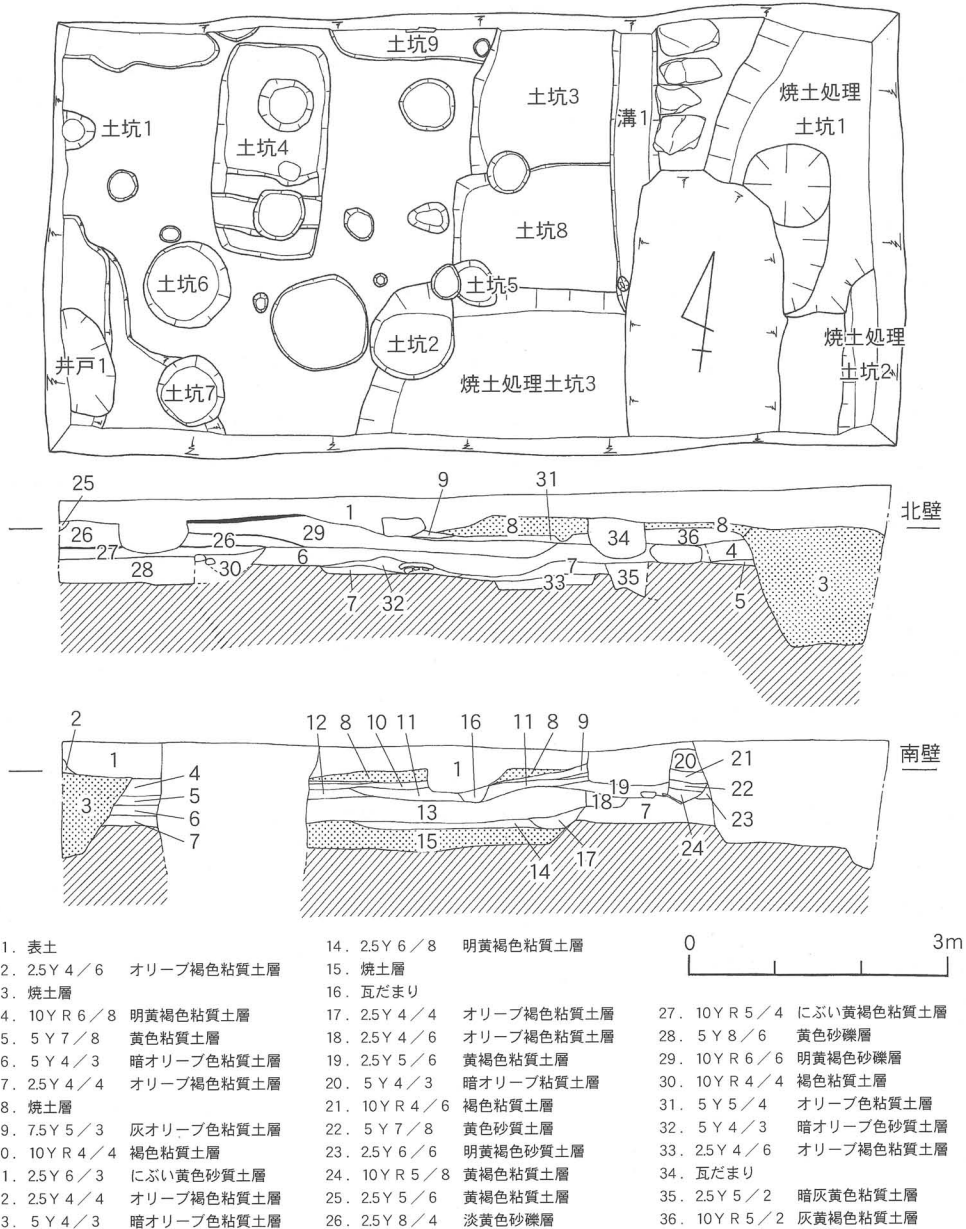


図28. 遺構図

列1条である。このうち主な遺構について説明することにする。焼土処理土坑1・2は、方形で調査区東隅にあり、調査区外へつづいている。深さは焼土処理土坑1は1.3m、2は1mを測る。埋土は焼けた瓦や炭などを多く含む焼土層である。焼土処理土坑1の出土遺物は図29-1~5に示したように17世紀後半で、焼土処理土坑2も同時期と考えられる。焼土処理土坑3は検出長は東西3.1m、南北1.8m、深さ35cmを測る。埋土は瓦は含まず焼土と炭が密に入っている。図29-6~9、写真23-1~5にあるように土師皿、瀬戸美濃焼菊花皿・天目碗、胎土目積の唐津碗、中国製の青花碗、丹波焼播鉢(1本引きの播目)等の出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。北壁に切られている土坑3は深さ10cmを測り、オリーブ褐色粘土層の埋土で、口縁部が直線的に開く土師皿等が出土した。土坑8は深さ20cmを測り、砂目積の唐津焼鉢が出土した。土坑2は円形で径1m、深さ30cmを測る。土坑3は16世紀後半で、土坑8と土坑2は17世紀前半と考えられる。溝1は石列1と同じ南北方向に走っていて、当地点の西側を通る道路と同一方向である。埋土はオリーブ色粘土層で17世紀前半の青磁天目碗・土師皿・焙烙等が出土し



写真19. 調査風景(奥側旧岡田家住宅)



写真20. 焼土処理土坑1(左)、焼土処理土坑2(右)



写真21. 土坑3、土坑8、焼土処理土坑3(手前より)

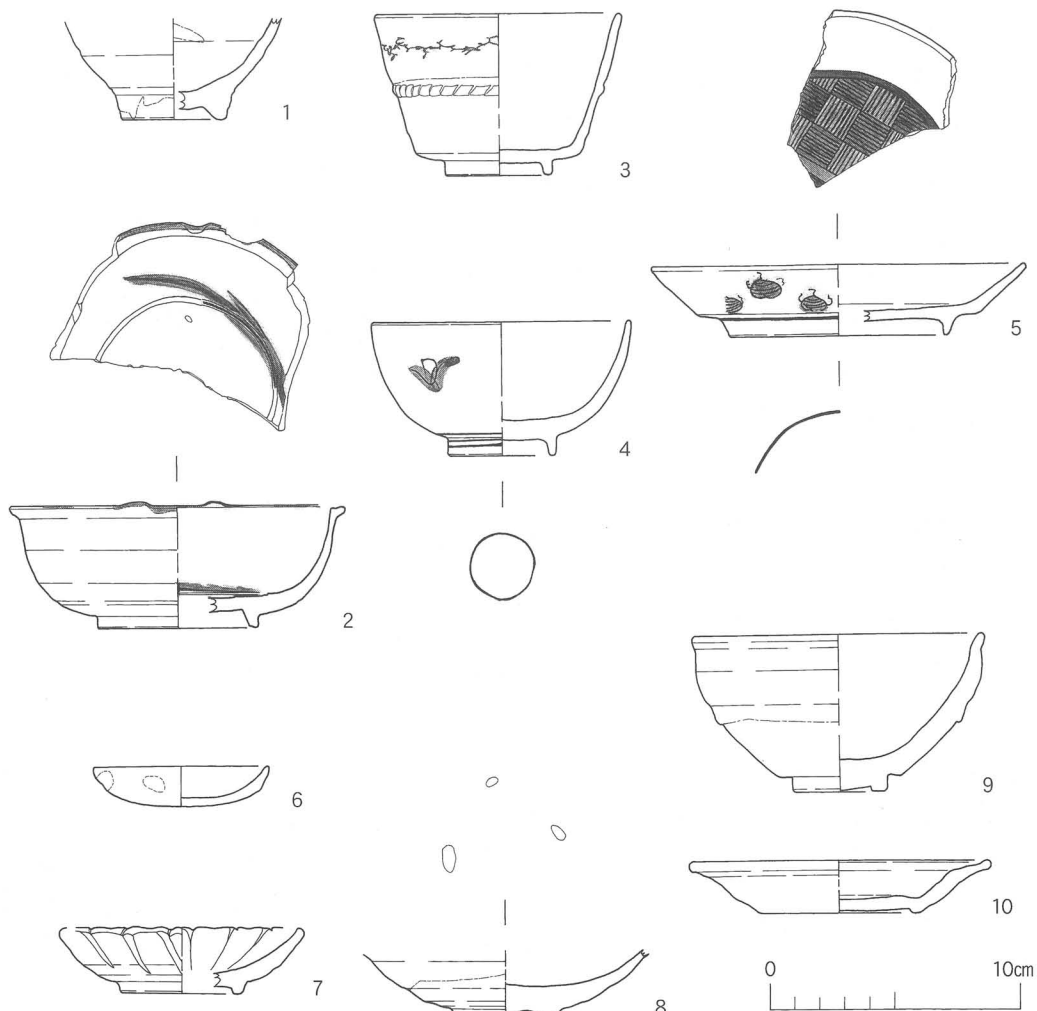


図29. 出土遺物実測図

た。土坑4は方形で、東西1.3m、南北2.5mを測る。深さ60cmのところでは一旦平らになり、その面で2箇所、円形の穴が掘られている。径60cm、深さ30cmを測り、17世紀後半と考えられる遺物が出土した。井戸1は調査区の南西隅、表土から1.5mの深さのところでは検出した。径1.2m、素掘りで19世紀代の遺物が出土した。井戸1の上層、表土から深さ30cmのところでは土師質の火消壺を蓋と身のセットになったもの2個確認した。(細川)

遺物 1～5は焼土処理土坑1から出土した。1は陶器の小坏で残存高4.0cm、高台径4.2cmである。体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。削り出し高台である。内外面共に長石釉を掛け、畳付と高台内は露胎である。2は陶器碗で、口径13.4cm、器高4.8cmである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部ではほぼ直角に外反し、端部をわずかにつまみ上げる。削り出し高台である。畳付と高台内は露胎である。見込みには1条の沈線が巡り、目跡が残

る。口縁部は口錆で、見込みに鉄絵が施されている。3は陶器碗で、口径9.5cm、器高6.4cmである。見込みに3ヶ所の目跡が残る。高台畳付は露胎である。体部外面中央部には縄目の文様を浮彫りで施し、体部下半部には鉄釉を、体部上半部と内面全体には灰釉を掛け分けている。外面上半部には鉄絵(唐草文様)を施している。4は肥前染付磁器碗で、口径10.4cm、器高5.3cmである。外面に染付が施され、高台内には1条の圏線が巡る。5は肥前染付磁器皿で、口径15.0cm、器高2.8cmである。体部は高台から平坦に張り出し、そこから直線的に開く。外面には宝珠文が、見込みには幾何学文が施され、高台内に1条の圏線が巡る。1～5は17世紀後半と考えられる。

6～9は焼土処理土坑3から出土した。6は完形の手捏ね成形の土師皿で、口径7.0cm、器高1.6cmである。底部は緩やかな丸みを持ち、口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁部外面には指頭圧痕が残る。内面全体にナデ調整を行う。口縁部の一部に煤の付着が見られるので、灯明皿として使用されていたと考えられる。色調は淡灰黄色である。7は瀬戸美濃焼の菊花皿で、口径9.8cm、器高2.65cmである。内面は型押し成形、外面は削りで花卉を施している。8は唐津焼の皿で、残存高2.5cm、高台径4.0cmである。内面には胎土目が3カ所存在する。高台は低く削り出されている。灰釉を施しているが、2次焼成を受けたため釉は変色している。露胎の部分は暗褐色を呈する。9は瀬戸美濃焼の天目碗で、口径11.6cm、器高6.2cmである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で直立して、端部でわずかに外反する。削り出し高台である。写真23-1～4は焼土処理土坑3から出土した。1は丹波焼播鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部の断面は三角形状である。指押えの後横ナデ調整を行う。内面にはヘラ描きの播目が施されている。2～5は中国製の青花の口縁部片である。体部の器壁は薄い。呉須の発色は良好である。明末の碗であろう。6～9、写真1～5は17世紀前半と考えられる。

10は北壁30層から出土した瀬戸美濃焼の灰釉皿で、推定口径12.0cm、器高2.1cmである。体部は緩やかに外反しながら口縁部に到り、端部を丸く収める。口縁部内面はわずかに段を成している。高台は浅く削り出されている。見込みと高台内に輪トチン跡が残る。17世紀前半と考えられる。

(岡野)

小結 当地点では旧岡田家住宅に関連した遺構は検出できなかった。遺構の時期は、概ね17世紀前半と17世紀後半の2つに分かれる。後者の時期は旧岡田家住宅の創建期にあたる。これ以外の遺構では土坑3が有岡城期、井戸1が19世紀代と考えられる。調査地点の北側に位置する光明寺の調査(第100次)と同様に2度の火災跡を検出した。伊丹郷町では江戸時代の記録によると、元禄年間(1688～1704)に3度大火があったが、当地点の2度目の火災は「寺院六ヶ寺、酒家十六軒」などが焼けた元禄十二年(1699)の大火と推定され、最初の火

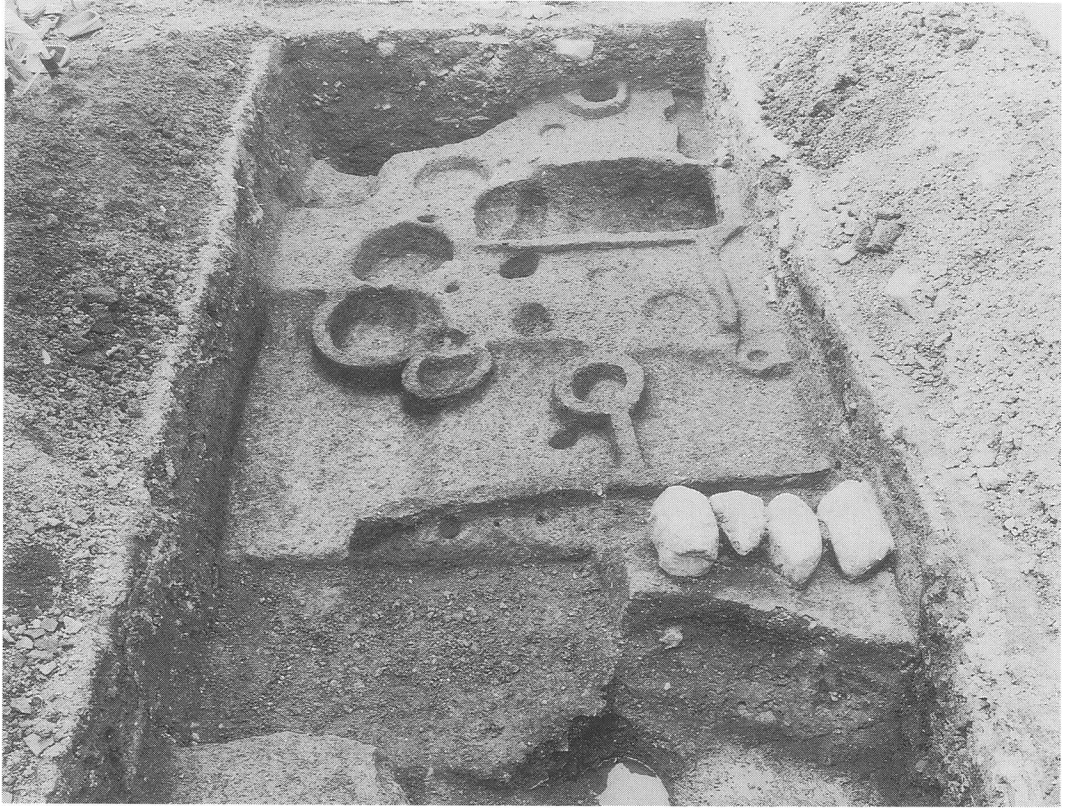


写真22. 調査区全景(東より)

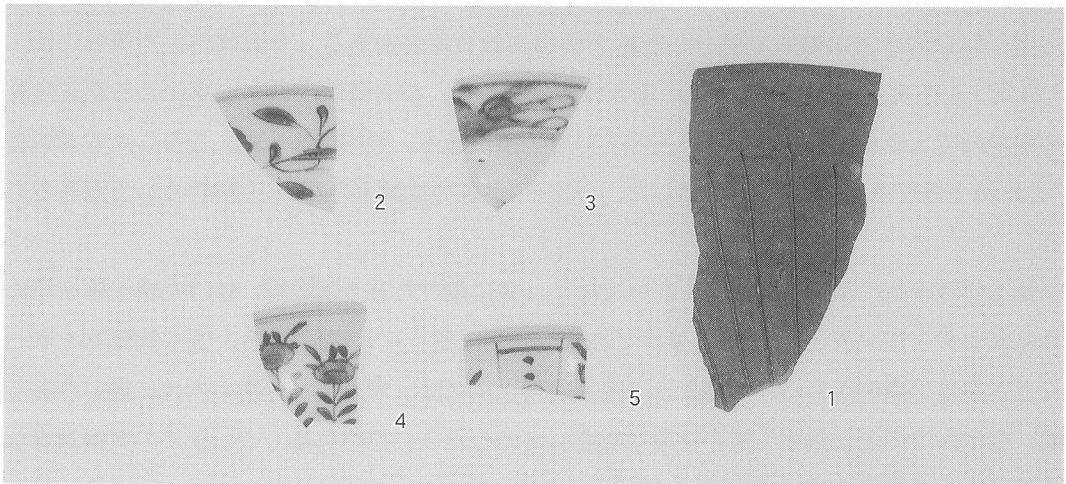


写真23. 出土遺物

災は17世紀前半に起きた記録にないものと考えられる。

(細川)

IV まとめ

本書は、平成3年度から5年度にかけて実施した国庫補助事業をまとめたものである。この3ヶ年に実施した国庫補助事業は、合計12ヶ所であるが、本書に掲載していない調査結果については、「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅱ・Ⅲ」において既に報告している。

本書にて報告している遺跡は、昆陽寺境内遺跡第3次、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第102次・108次・118次・121次・128次・132次である。いずれの調査も調査面積が狭く、短期間の調査となっている。本書には、各調査で出土した遺物の一部を掲載するにとどまっている。とくに、有岡城跡第121次・132次調査では、多数の出土遺物があり、今後本報告に向けて整理する必要がある。

本書にて報告する有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査は、有岡城惣構えの町屋(城下町)と寺院の調査である。報告にあたり、制約された紙面の中で意識的に出土遺物を選択して図示している。今回図示した遺構出土の遺物は、火事によって処分された陶磁器を主に取り上げている。

伊丹郷町では、記録によると江戸時代に何度も町ぐるみを焼き払うような火事が起きており、こうした火事の跡は、発掘調査によって確認できることがある。火事の痕跡としては、例えば光明寺の発掘調査(第100次調査)〔伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅰ〕1992)のように、広範囲にわたって焼土層や炭・灰層が検出される場合と、火事後、敷地の整理がなされ焼け瓦や陶磁器などの塵灰を処分した跡が検出される場合がある。今回報告した第108次、121次、128次、132次の各調査の場合は後者である。伊丹郷町では、火事による塵灰はその敷地内で大きな穴を掘って埋め込むという方法が最も一般的であった。こうした穴を本書では「焼土処理土坑」と呼ぶことにした。つまり「火事後始末のための土坑」という意味である。

焼土処理土坑には焼土や炭・灰だけでなく、主に焼けた瓦や陶磁器、焼けた壁土等を埋め込んだものと炭・灰と焼土(主に焼けて赤く変色した壁土)のみを埋込み、瓦や陶磁器をほとんど含まない事例がある。このように焼土処理土坑には、埋められた物の内容に違いがある他、敷地内での焼土処理土坑の位置にも違いがあるように思われる。これまでの発掘調査から次のような関係が考えられる。

- A：主に炭・灰・焼土を埋め込んだものは、敷地の玄関側から検出されることが多い。この場合は、建物の建つ範囲に位置し、建物の方向に合わせて造られる。

B：主に瓦・陶磁器を埋め込んだものは、敷地の奥側に位置し、建物の範囲から外れた場所に造られる。

Aパターンの例として、第66次、第135次などがあるが、火事後整理して再び建物を建てる場合、こうした土坑の存在は地盤が緩むなどの難点があるように推測されるが、敢えてこの場所を選択する理由があると考えられることもできる。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査は、平成11年3月現在220次を越える調査を実施してきている。年間の調査件数が多いことに加え、近世町屋遺跡の特長としておびただしい遺物の出土量があることから、発掘調査後の整理・報告作業が進んでいない。本書は個人住宅建設に伴う小規模な発掘調査を中心に掲載しているが、図示した遺物は全体の一部である。今後本格的に整理を行い、資料化を図っていく必要を痛感している。 (小長谷)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いたみしまいぞうぶんかざいちょうさがいほう							
書名	伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅴ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	小長谷正治 細川佳子							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地 TEL0727-84-8090 (直)							
発行年月日	西暦1999年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こやでらけいだいせいせき 昆陽寺境内遺跡第3次調査	ひょうごけんいたみしてらもと 兵庫県伊丹市寺本2丁目167	28207	61	34°46'24"	135°23'26"	19930122~ 19930127	28	寺院庫裡 建替
ありおかじょうせき 有岡城跡第102次調査	みやのまえ 宮ノ前1丁目91-9	"	"	34°46'47"	135°25'4"	19910625~ 19910627	16	個人住宅 建設
有岡城跡第108次調査	ちゅうおう 中央2丁目8-7	"	"	34°46'42"	135°25'8"	19920421~ 19920424	20	店舗付個人 住宅建設
有岡城跡第118次調査	ちゅうおう 中央2丁目8-7	"	"	34°46'38"	135°25'6"	19930216~ 19930222	30	寺院建設
有岡城跡第121次調査	ちゅうおう 中央3丁目398-1	"	"	34°46'41"	135°25'10"	19930603~ 19930611	90	店舗付個人 住宅建設
有岡城跡第128次調査	みやのまえ 宮ノ前3丁目59-1	"	"	34°46'51"	135°25'6"	19930819~ 19930821	24	個人住宅 建設
有岡城跡第132次調査	みやのまえ 宮ノ前2丁目5-3	"	"	34°46'	135°25'11"	19940118~ 19940128	50	"
主な遺物	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
昆陽寺境内遺跡第3次調査	寺院	中世	溝跡2 柱穴16 土坑2			土師器 瓦 陶磁器 1箱		
有岡城跡第102次調査	城館・町屋	中世・近世	土坑8			陶磁器 1箱		
有岡城跡第108次調査	"	"	柱穴14 焼土処理土坑1 土坑6			陶磁器 1箱		
有岡城跡第118次調査	"	"	柱穴17 埋甕2 土坑11			陶磁器 1箱		
有岡城跡第121次調査	"	"	堀跡1 井戸跡3 礎石1 溝跡2 柱穴7 焼土土坑2 土坑23			陶磁器 18箱		
有岡城跡第128次調査	"	"	柱穴3 焼土処理土坑1 土坑11			陶磁器 1箱		
有岡城跡第132次調査	"	"	井戸跡1 溝跡1 石列1 柱穴3 焼土処理土坑3 土坑17			陶磁器 4箱		

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅴ

1999年3月

発行 伊丹市教育委員会
兵庫県伊丹市千僧1丁目
TEL 0727-83-1234
印刷 アイシー印刷株式会社

